

※ Windows 環境にて、本 UPS (Smart-UPS500J) を使用し、PowerChute Business Edition エージェントをインストールすると、UPS の自動検出において、「PowerChute Business Edition はこの機種 of UPS をサポートしていません」というメッセージが表示され、インストールが終了します。本 UPS は自動検出を行わず、手動で設定してください。

NEC Express5800 シリーズ

PowerChute® Business Edition v.7.0

インストールガイド

ごあいさつ

本ガイドは、PowerChute® Business Edition v.7.0、および関連製品やインストール方法について説明しています。『PowerChute® Business Edition v.7.0』をご使用になる前に必ずお読みください。

Windows® は米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標です。

Smart-UPS®, PowerChute® は American Power Conversion Corporation の登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Red Hat® は、Red Hat, Inc. の登録商標です。

その他の会社および製品の名称は、総てそれぞれの所有する登録商標または商標です。

インストールガイド：

PowerChute® Business Edition v.7.0

American Power Conversion Corporation -- ソフトウェア使用許諾契約書

本ソフトウェア使用許諾契約書の翻訳は、ユーザの便宜のみを目的として提供されています。詳細は、下記のセクション 11 を参照してください。

本ソフトウェア使用許諾契約書（以後「契約書」）は、「ライセンサー」である American Power Conversion Corporation（以後「APC」）およびユーザ（以後「お客様」）の間で結ばれた法律上の契約であり、本契約書が付属している APC ソフトウェアに関するものです。

注釈：本ソフトウェア製品のボタンラベルが「同意します」と異なる場合（「はい」など）、「同意します」に読み替えてください：

[I agree (同意します)] ボタンをクリックする、またはダウンロード、インストール、ロード、コピー等の方法でソフトウェアを使用することにより、ユーザは次のいずれか意思表示をしたこととなります。

* ユーザは、お客様（ユーザが代表となることを許可された法人）の代表としてこれらの条件を承諾する権限を得ている。

* ユーザは、お客様として本契約書の条件に従い個人的に契約する意思がある。

ユーザが代表となることを許可された法人の代表者としてこれらの条件を承諾した場合、ユーザはその法人の代表としてのみ本ソフトウェアを使用できます。個人的に契約した場合、本ソフトウェアの使用はユーザ個人での使用に限られます。

注釈：本ソフトウェア製品のボタンラベルが「同意しません」と異なる場合（「いいえ」など）、「同意しません」と読み替えてください：

ユーザが企業またはその他の法人の代表としてこれらの条件を承諾する権限を得ていない、もしくは個人的に契約する意思がない場合、APC は本ソフトウェアをライセンスいたしませんので、「同意しません」ボタンをクリックしてください。

本契約書の条件に違反して本ソフトウェアをインストールまたは使用すると、米国著作権法および国際条約に違反することとなります。

APC ソフトウェアにサードパーティ製ソフトウェアが付属している場合、当該サードパーティ製ソフトウェアは本ライセンス契約条件の対象外となります。当該サードパーティ製ソフトウェアのライセンス契約が、当該ソフトウェアに関するお客様およびライセンサーの責任を規定します。

1. ライセンスの許可

これにより、APC は本契約書の条件に従って本ソフトウェアの使用に関する非独占的、譲渡不可能なライセンスを許可し、お客様はそのライセンスを受諾することに同意します。本ソフトウェアは、APC またはそのサプライヤが所有し、著作権を保有しています。お客様のライセンスはソフトウェアの所有権または権限を付与するものではなく、本ソフトウェアにおける権利を販売するものでもありません。APC は、本ソフトウェアおよびすべての修正に関する所有権および権限をすべて保持しています。

お客様が貸与、リース、先取特権の付与、またはその他の方法で本ソフトウェアに対する権利を譲渡することは禁止されています。また、お客様がソフトウェア内の商標、ロゴ、著作権等の所有権表示、銘板、シンボル、またはラベルを除去し、改変することも禁止されています。

2. 使用権

本ソフトウェアは、本契約書の本「使用権」セクション、または関連した送り状に記載された人数のユーザによる使用、または記載された台数のサーバまたはワークステーション上での使用（あるいはその両方）に関してのみライセンスされます。

お客様は、本ソフトウェアを次のいずれかの方法で使用できます。

* APC UPS を電源とする単一のファイルサーバ上で、その単一のファイルサーバに接続されたコンピュータおよび関連周辺装置にサービスを提供する目的での使用

* 同一 APC UPS を電源とする 1 台または複数台のコンピュータ上での使用

* Web サーバをサポートする目的での使用 (Web サーバは、1 つまたは複数のネットワーク上に存在する不定台数のワークステーションまたはコンピュータに制限なく接続できます)

3. 複製権

お客様は、次の目的に限り、本ソフトウェアのコピーを作成できます。

* お客様は、保存またはバックアップの目的で本ソフトウェアのコピーを1部作成できます。
* お客様は、本契約書、または本ソフトウェアに付属のドキュメンテーション（あるいはその両方）の記述に従って、認可および意図された方法で本ソフトウェアを使用するために必要な場合に限り、本ソフトウェアおよびドキュメンテーションの追加コピーを作成できます。お客様は、次の目的に限り、本ソフトウェアのコピーを作成できます。

すべてのコピー（保存用コピーを含む）には、APC 著作権表示、およびライセンスされたソフトウェアに付属しているその他の所有権表示が含まれている必要があり、また本契約書の条件に完全に従っている必要があります。

お客様は、本ソフトウェアを再配布してはならず、また再配布の目的でコピーを作成してはなりません。

4. 制限事項

お客様は、次のことを行ってはなりません。

* 逆アセンブル、逆コンパイル、またはその他の方法で本ソフトウェアからソースコードの生成を試みることを。

* 本ソフトウェア、または本ソフトウェアの任意の部分をもとに、模倣物を作成すること。

* 事前の書面による APC の承諾なしに、本ソフトウェアまたはそのドキュメンテーションをローカライズまたは翻訳すること。

* 事前の書面による APC の承諾なしに、本ソフトウェアに対して実行したベンチマークテストの結果を第三者に公開または提供すること。

5. 本契約の期間および終了

本ライセンスは、お客様が本契約に従って本ソフトウェアを使用する限り継続するものとし、お客様が義務のいずれかに違反した場合、本ライセンスは終了するものとし、APC による通告および要求に応じて、お客様は本ソフトウェアのコピーすべてと、本ソフトウェア用に提供された、または本ソフトウェアに付属していた資料すべてを破棄または返却することに同意するものとし、お客様は、本ソフトウェアおよびドキュメンテーションのコピーすべてを APC に返却することによって、本契約を終了できます。

6. 限定保証

APC 限定保証は、お客様が本ソフトウェアを受け取った時点から 90 日間適用されます。

APC は、限定保証期間中に、本ソフトウェアが付属のソフトウェアユーザドキュメンテーションに記載されているとおりに機能すること、および通常の適切かつ意図された使用条件では、本ソフトウェアが収録されている媒体の材料および品質に欠陥がないことを保証します。

本保証は、次の場合には適用されません。

* 本ソフトウェアが、ドキュメンテーションに指定されたもの以外のマシン、または指定されたバージョン以外のオペレーティングシステム上で使用された場合。

* 本ソフトウェアが、誤用、過失、事故、またはドキュメンテーションに指定された条件を超える環境条件にさらされたことにより、損傷を受けた場合。

* APC が提供する修正プログラムの一部を適用していないバージョンのソフトウェアを使用した場合。

* ソフトウェアが改造された場合。

APC は、ソフトウェアが中断またはエラーなしに使用できること、およびプログラムエラーが修正されることを保証しません。

本保証において APC が負う義務、およびお客様が受けられる補償は、APC の判断に基づく、ソフトウェア全体または一部の修理または交換、または支払われたライセンス料金の払い戻しのみです。本限定保証は、APC が 90 日の保証期間中に書面による通告を受け取った場合にのみ有効です。

7. 保証および義務の制限

本契約書のセクション 6「限定保証」に明示的に規定されたものを除き、以下の制限があります。(i) APC は本ソフトウェアに関し、お客様または第三者に対して、過失に関する義務を含むいかなる義務も負いません。(ii) 明示的なもの、暗黙的なもの、法律上のもの、本契約書のその他の規定にあるもの、もしくはその他の連絡手段にあるものを問わず、APC は一切の保証を行

わず、お客様は一切の保証を受けません。(iii)APC は、商品性、特定目的に対する適合性、権限、特許権無侵害を含む、いかなる保証も行いません。

APC は、いかなる場合においても、派生的損害、間接的損害、特別損害、複合損害、または付随的損害に関して一切責任を負わないものとします。たとえ APC がかかる損害の可能性に関して知らされていた場合でも同様です。

国または地域によっては、暗黙的保証の除外、または付随的あるいは派生的な損害の制限が許可されていないため、前述の制限または除外が適用されない場合があります。ただし、該当する法律によって許可されたすべての範囲で、法律上必須の保証（存在する場合）の有効期間は、90 日の保証期間に制限されます。

APC のディーラ、代理店、従業員、お客様は、本限定保証を変更、拡張、追加することを許可されていません。本ソフトウェアに関連した請求に対する、お客様への APC の累積負担は、お客様が本ソフトウェアに対して APC に支払ったライセンス料金すべての合計額を超えないものとし、またライセンス料金が不要であった場合は、ソフトウェアの交換を超えないものとします。

8. 危険な状況、リスクの高い状況、または人命に関わる状況における無保証

本ソフトウェアはフォールトトレラントではなく、安全の保証された動作を必要とする危険な環境（ソフトウェアの障害が、死亡、けが、または重大な物理的損害、環境汚染に直接つながる原子力施設、航空機のナビゲーションシステムまたは通信システム、航空交通管制、直接生命維持装置、兵器システム等の操作）での制御機器として使用または再販売するために設計または製造されておらず、そのような目的のものではありません。したがって、APC およびそのサプライヤは、このような危険な活動、リスクの高い活動、または人命に関わる活動に対する明示または暗黙の適合性の保証を一切行いません。

9. カスタマサポートに関連した技術情報の使用

お客様は、技術 / カスタマサポート サービスを受けている間にお客様が提供した技術情報を、APC が使用することに同意するものとします。APC は、かかる情報を自社の業務上の目的（製品のサポートや開発等）に利用できますが、お客様の身元が分かるような形態でかかる情報を使用しないことに同意します。

10. 譲渡に関する制限

本契約書、本契約書のもとで許可されるライセンス、本ソフトウェア、および本ソフトウェアに対するすべての修正は、事前の書面による APC の承諾がなければ、譲り受けることも、いかなる方法で譲渡することもできません。

11. 契約書の言語および地域

本契約書の原典は英語で書かれています。本書の関係者は、別の法律または裁判所を規定する可能性のある規則、法律、または規制の適用、または英語以外で書かれた本契約書を所持することを要求しないものとします。本契約書を英語以外の言語に翻訳したものは、お客様の便宜のみを目的として提供されるものであり、本契約書の法的拘束力を持つ版ではありません。

本契約書の条件は、米国マサチューセッツ州の法律に準拠して解釈され、当州の法の抵触に関する原則、または法律の選択には効力を及ぼしません。APC とお客様は、物品の国際売買契約に関する国連協定 (United Nations Convention on Contracts for the International Sale of Goods) を本契約書に適用しないものとします。

12. 米国政府の制限された権利の説明

本ソフトウェアおよびドキュメンテーションは、「商業用品目」(48 C.F.R. 2.101(1995 年 10 月)で定義されている用語に従う)であり、「商業用コンピュータソフトウェア」および「商業用コンピュータソフトウェアドキュメンテーション」(48 C.F.R. 227.7202-1、227.7202-3、および 227.7202-4(1995 年 6 月)で使用されている用語に従う)で構成されます。お客様が米国政府、またはその機関または省である場合、本ソフトウェアおよびドキュメンテーションは商業用品目としてのみライセンスされ、本契約書の条件に準ずる他のすべてのエンドユーザーに対して許可される権利だけが与えられます。ライセンサーは、American Power Conversion Corporation, P.O. Box 278, 132 Fairgrounds Rd., West Kingston, RI 02892, U.S.A. です。

13. 輸出規制

本ソフトウェア、またはその基礎となる情報または技術は、次のいずれに対しても、ダウンロード等の方法により再輸出することはできません。

- * 米国が通商禁止品目を指定している対象国 (あるいは国民または在住者)
- * 米国財務省の特別指定国民 (Specially Designated Nationals) リストに記載されている者
- * 米国商務省の発注拒絶表 (Table of Denial Orders) に記載されている者

本ソフトウェアのダウンロードまたは使用により、お客様は前述のことに同意したものとし、お客様がかかる国に所在しないこと、かかる国の管理下にないこと、かかる国の国民または在住者でないこと、かかるリストに記載されていないことを保証するものとします。

お客様は、本ソフトウェアの輸出入または使用に影響する可能性のある、地域の法律を遵守する義務があり、本ライセンスを実施可能にするために当該法律が要求する規制や登録手順を遵守していることを意思表示したものとします。

ライセンスおよび商標

APC のロゴ、APC、Back-UPS、Back-UPS Pro、FlexEvent、Matrix-UPS、Measure-UPS、Power Array、PowerChute、PowerStack、PowerXtend、Share-UPS、SmartBoost、SmartCell、SmartTrim、Smart-UPS、および Symmetra は、American Power Conversion Corporation の商標または登録商標です。

他の商標、製品、および企業名は、それぞれの企業が保有し、ここでは参照用としてのみ用いられています。

AMERICAN POWER CONVERSION CORPORATION

本社	日本
132 Fairgrounds Road P.O. Box 278 West Kingston, RI 02892 United States of America	〒 141-0031 東京都品川区西五反田 2-30-4 BR 五反田 7 階
Telephone: 401-789-5735 Toll Free (US and Canada): 800 800 4272	電話 : 03-5434-2021 Fax: 03-5434-2022.

目次

第 1 章	PowerChute Business Edition 製品の内容	1
第 2 章	ハードウェア要件	1
第 3 章	ソフトウェア要件	3
第 4 章	PowerChute Business Edition 概要	4
	4.1 はじめに.....	4
	4.2 PowerChute Business Edition のコンポーネント.....	5
	4.3 システム構成例とインストールコンポーネント.....	5
	(1) UPS に接続するサーバ本体のみで管理する構成.....	5
	(2) ターミナルサービス経由で管理する構成.....	6
	(3) UPS に接続するサーバをリモートのマネージャから管理する構成.....	7
第 5 章	PowerChute Business Edition v.7.0 インストール (Windows 版)	10
	5.1 PowerChute Business Edition エージェントのインストール.....	12
	5.2 PowerChute Business Edition サーバのインストール.....	14
	5.3 PowerChute Business Edition コンソールのインストール.....	20
第 6 章	PowerChute Business Edition v.7.0 インストール (Linux 版) ..	22
	6.1 対象サーバで直接インストール作業を行う場合.....	22
	6.2 config.sh による PowerChute Business Edition エージェントの設定.....	22
	PowerChute Business Edition エージェントを インストール後の設定.....	22
	config.sh を使用しての PowerChute Business Edition エージェントの設定変更.....	24
第 7 章	PowerChute Business Edition v.7.0 アンインストール	26
	7.1 OS が Windows の場合 (エージェント、サーバ、コンソール共通).....	26
	7.2 対象サーバで直接アンインストール作業を行う場合 (Linux の場合).....	28
第 8 章	コンソールの操作	29
	8.1 サーバへの接続.....	29
	8.2 エージェントの登録.....	29
	8.3 エージェントの削除.....	33
	8.4 サーバが自動検出されない場合の対処方法.....	34
	8.5 エージェント登録時のエラーおよびステータスメッセージ.....	36
	(1) 設定プロファイルアクセス失敗メッセージ.....	36
	(2) デバイスリスト設定ウィザードのメッセージ.....	36
	(3) 検出過程のメッセージ.....	37
	(4) サマリの変更メッセージ.....	37
	(5) 通信障害関連メッセージ.....	39

第 9 章	WebUI での操作	41
	9.1 Java Runtime Environment の確認.....	41
	9.2 エージェントへの接続.....	42
	9.3 エージェントの設定.....	43
	9.4 イベントアクションの設定.....	46
第 10 章	シャットダウンプロセスについて	50
	10.1 シャットダウンシーケンスの設定.....	50
	10.2 シャットダウンタイプの設定 (Windows サーバのみ)	54
	「シャットダウン」を選択した場合	55
	「シャットダウンと電源オフ」を選択した場合	55
	「休止する」を選択した場合	56
	10.3 スケジュールによるシャットダウンプロセス.....	57
	10.4 電源障害時のシャットダウンプロセス (電源保護方針が「安全性を重視」の場合).....	58
	10.5 電源障害時のシャットダウンプロセス (電源保護方針が「ランタイム重視」の場合).....	60
第 11 章	スケジュールシャットダウンの設定.....	64
第 12 章	UPS との通信設定について	67
	12.1 通信ポートの変更.....	68
第 13 章	コンソールと WebUI における機能差分.....	70
第 14 章	障害発生時の資料採取方法.....	72
	14.1 Windows 環境	72
	PowerChute Business Edition のログ	72
	OS のイベントログの採取	73
	システム情報ファイル	73
	Collect ログと IPMI ログ	74
	確認事項	74
	14.2 Linux 環境.....	80
	コマンドラインから行う場合	80
	シスログの採取	81
	確認事項	81
	14.3 障害調査依頼票	82
第 15 章	注意事項.....	84

1 PowerChute Business Edition 製品の内容

PowerChute Business Edition の製品内容は次の通りです。添付品が全てそろっているかどうか、確認してください。

- PowerChute Business Edition v.7.0 (CD-ROM 媒体)
- インストールガイド (本書)
- リリースノート
- インタフェースケーブル (940-0024C)

注意: インストール CD-ROM 媒体内には「Solaris」用のインストールモジュールも含まれていますが、Solaris の機能はサポートしていません。

ユーザーズガイドについて

ユーザーズガイドは、HTML 形式のオンラインヘルプ (コンパイル済み HTML ファイル) が用意されています。HTML 形式のオンラインヘルプを参照するには、以下のいずれかの方法にて参照してください。

- PowerChute Business Edition の各 GUI 上の [ヘルプ] ボタンをクリックする。
- PowerChute Business Edition コンソール画面の [ヘルプ] → [目次] および [現トピックのヘルプ] を選択する。
- [スタート] → [プログラム] → [APC PowerChute Business Edition] → [コンソールのヘルプ] を選択する。

2 ハードウェア要件

本製品を使用するには以下の環境が必要です。

メモリ

- エージェント : Windows 版 128MB 以上
Linux 版 128MB 以上
- サーバ : 256MB 以上
- コンソール : 128MB 以上

空きディスク容量

- エージェント : Windows 版 62MB 以上 (うち JRE 約 47MB)
Linux 版 68MB 以上 (うち JRE 約 52MB)
- サーバ : 97.5 MB 以上 (うち JRE 約 47MB)
- コンソール : 40 MB 以上

本体装置および接続ケーブル

- 本製品に対応する本体装置
 - Express5800 シリーズ
- UPS と本体装置を接続するシリアルケーブルは、本製品に同梱されているインタフェースケーブル (940-0024C) を使用してください。

BIOS の設定

- シリアルポート (COM ポート) の設定

BIOS の設定で保守コンソール用に割り当てられている COM ポートを、UPS 用に使用した場合に UPS が誤作動することがあるため、保守コンソール用に割り当てられている COM ポートを UPS 用として使用しないでください。

また、UPS に使用している COM ポートを BIOS の設定で保守コンソール用として割り当てると、UPS が誤作動することがあるため、UPS に使用している COM ポートを保守コンソール用に使用しないでください。

注意：ご使用のサーバ装置によっては、使用可能なシリアルポートが **COM2** のみと限定されている場合があります。サーバ装置に添付のユーザーズガイドを参照し、使用可能なシリアルポートをご確認ください。

- AC-LINK の設定

サーバ装置における BIOS の設定により、UPS からの電力供給が開始されても、サーバが起動しない場合があります。BIOS の設定を確認してください。

== UPS を使って自動運転を行う場合の注意 ==

UPS を使って自動運転を行う場合は、サーバ装置の BIOS の設定で、AC-LINK(AC 連動モード) を「Power ON」にさせていただく必要があります。BIOS の設定方法については、サーバにより異なります。サーバ本体添付のマニュアルを参照してください。

注意 :AC-LINK は、サーバ機種により「After Power Failure」と記載されている場合があります。

3 ソフトウェア要件

本製品を使用するには、次のいずれかの OS が必要です。

- Windows 2000 Professional/Server/Advanced Server (Service Pack 4以降)
- Windows XP Professional (Service Pack 1a 以降)
- Windows Server 2003 Standard Edition/Enterprise Edition/Small Business Server (32bit 版のみ)
- Red Hat Linux 7.3 (PowerChute Business Edition エージェントのみ)
- Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 (PowerChute Business Edition エージェントのみ)
- Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 (PowerChute Business Edition エージェントのみ)
- MIRACLE LINUX Standard Edition 2.1 (PowerChute Business Edition エージェントのみ)

PowerChute Business Edition では、TCP/IP によるネットワーク接続されていることが必要です。

旧バージョンの PowerChute Business Edition が既にインストールされている場合は、旧バージョンの PowerChute Business Edition をアンインストールした後、本バージョンの PowerChute Business Edition をインストールしてください。

WebUI 機能を使用する際には、Web ブラウザは以下をご使用ください。

- Windows マシンからエージェントにアクセスする場合、Internet Explorer 6 以降をご使用ください。
- Linux マシンからエージェントにアクセスする場合、Netscape 7.0 をご使用ください。

※ Windows マシンから Internet Explorer Version 6、または Linux マシンから Netscape 7.0 を使用して WebUI 機能を利用する場合、Sun の Java Runtime Environment (JRE) が必要となります。

- Windows マシンから Internet Explorer を使用する場合は JRE v1.4.1 または v1.4.2 をご使用ください。
- Linux マシンから Netscape を使用する場合は JRE v1.4.1 をご使用ください。

詳しくは 41 ページの「9 WebUI での操作」を参照してください。

注意：「**32 ビット Microsoft 仮想マシン (Microsoft VM)**」では WebUI 機能を利用できません。

注意：Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 マシンに Netscape をインストールする際、OS のインストール CD-ROM 媒体に含まれている「**compat-libstdc++-7.3-2.96.122.i386.rpm**」を先にインストールして下さい。

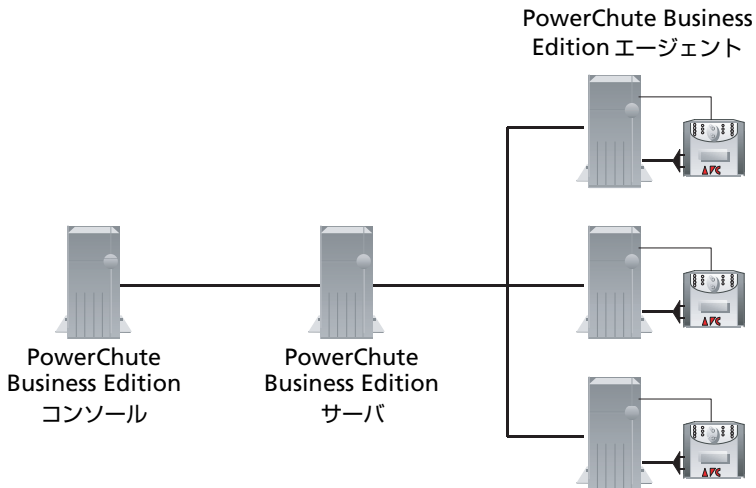
※ Windows 環境にて、本 UPS(Smart-UPS500J) を使用し、PowerChute Business Edition エージェントをインストールすると、UPS の自動検出において、

「PowerChute Business Edition はこの機種の UPS をサポートしていません」というメッセージが表示され、インストールが終了します。本 UPS は自動検出を行わず、手動で設定してください。

4 PowerChute Business Edition 概要

4.1 はじめに

PowerChute Business Edition ソフトウェアは、図のように PowerChute Business Edition エージェント、PowerChute Business Edition サーバ、および PowerChute Business Edition コンソールの 3 種類の独立したコンポーネントから成り立っています。各サーバにインストールされるコンポーネントの組み合わせは、特に制限がありません。例えば、1 つのサーバに全てのコンポーネントをインストールすることも可能です。



これらのコンポーネントの詳細については 5 ページの「4.2 PowerChute Business Edition のコンポーネント」を参照してください。各コンポーネントのインストールの概要は、Windows OS にインストールする場合は 10 ページの「5 PowerChute Business Edition v.7.0 インストール (Windows 版)」を、Linux OS にインストールする場合は 22 ページの「6 PowerChute Business Edition v.7.0 インストール (Linux 版)」を参照してください。

注意：PowerChute Business Edition v.6.1 の PowerChute Business Edition エージェントを PowerChute Business Edition v.7.0 のサーバおよびコンソールにて管理することはできません。同様に、PowerChute Business Edition v.7.0 の PowerChute Business Edition エージェントを PowerChute Business Edition v.6.1 のサーバおよびコンソールにて管理することもできません。

また、PowerChute Business Edition v.6.1 コンソールから PowerChute Business Edition v.7.0 サーバへの接続、および PowerChute Business Edition v.7.0 コンソールから PowerChute Business Edition v.6.1 サーバへの接続についても同様に未サポートです。

4.2 PowerChute Business Edition のコンポーネント

PowerChute Business Edition エージェント

UPS ステータス監視機能、および長時間の停電時に UPS が保護するコンピュータのシステムシャットダウン機能を提供しています。このソフトウェアは、UPS に直接接続されている各サーバ上にインストールする必要があります。

PowerChute Business Edition エージェントの設定と監視を行うために、PowerChute Business Edition サーバおよび PowerChute Business Edition コンソールが必要となります。

PowerChute Business Edition サーバ

PowerChute Business Edition エージェントの設定と監視を行うために用いられます。PowerChute Business Edition サーバは PowerChute Business Edition エージェントから情報を収集して、イベントの追跡や通知、PowerChute Business Edition コンソールと通信を行います。

1 台の PowerChute Business Edition サーバで管理できる PowerChute Business Edition エージェントの最大数は 25 台です。25 台を超える PowerChute Business Edition エージェントを管理する場合には、PowerChute Business Edition サーバは 2 台以上必要となります。

PowerChute Business Edition コンソール

PowerChute Business Edition サーバに接続して、UPS で保護されているシステムの管理と設定を行います。

注意 : **PowerChute Business Edition** で自動運転を行う場合、スケジュールシャットダウンの設定は **PowerChute Business Edition** コンソールでのみ行うことができます。

4.3 システム構成例とインストールコンポーネント

UPS を接続した管理対象となるサーバマシンの管理をどこから行うかによって、インストール方法は以下の選択肢があります。各マシンの OS がサポート対象の Windows であれば (1),(2) のいずれの構成も可能です。ただし、ターミナルサービスクライアントを使用してサーバを管理する場合は (2) の構成となります。UPS を接続したサーバマシンが Linux サーバの場合には、(3) の構成となります。

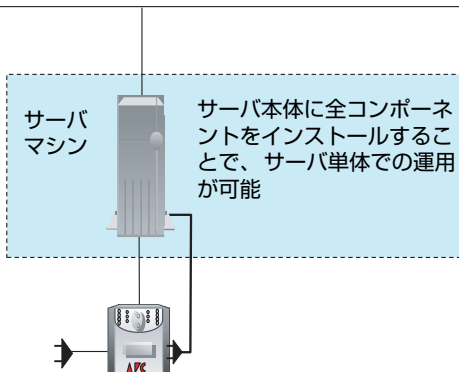
(1)UPS に接続するサーバ本体のみで管理する構成

サーバ OS が Windows であれば、サーバ本体に全コンポーネントをインストールして UPS の制御 / 管理を行うことが可能です。

※単体構成の場合でも TCP/IP によるネットワーク接続が行えることが必要になります。

サーバ	インストールするコンポーネント	備考
サーバマシン	PowerChute Business Edition コンソール PowerChute Business Edition サーバ PowerChute Business Edition エージェント	Windows サーバを使用 エージェントのインストール 時に「Smart-UPS」を選択

LAN



(2) ターミナルサービス経由で管理する構成

iStorage NS シリーズなど、ターミナルサービスクライアントを経由してサーバ管理を行うようなシステムの場合、使用するターミナルサービス接続用のクライアントアプリケーションが Windows 2000 の「ターミナルサービスクライアント」であるか「リモートデスクトップ接続」であるかにより、ターミナルサーバマシンへインストールする PowerChute Business Edition コンポーネントが異なります。

<Windows 2000 の「ターミナルサービスクライアント」を使用する場合>

Windows 2000 の「ターミナルサービスクライアント」を使用してターミナルサーバに接続し、PowerChute Business Edition コンソール、デバイスリストウィザード、および設定プロファイルウィザードを起動した場合、画面が正しく表示されません。これは「ターミナルサービスクライアント」の表示可能色数が少ないために発生します。

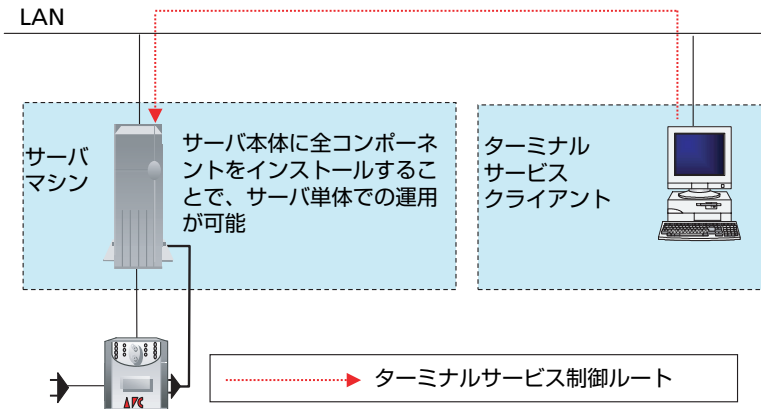
7 ページの「(3)UPS に接続するサーバをリモートのマネージャから管理する構成」の構成にてご使用ください。

<「リモートデスクトップ接続」を使用する場合>

「リモートデスクトップ接続」は PowerChute Business Edition を使用するための要件である『16 ビットカラー』の表示が行えますので、ターミナルサーバマシンにす

すべてのコンポーネントをインストールし、ターミナルサービスクライアントから「リモートデスクトップ接続」を使用して接続することで管理できます。

サーバ / マネージャ	インストールするコンポーネント	備考
サーバマシン	PowerChute Business Edition コンソール PowerChute Business Edition サーバ PowerChute Business Edition エージェント	Windows サーバを使用 エージェントのインス トール時に「Smart-UPS」 を選択
ターミナルサービス クライアント	なし	



(3)UPS に接続するサーバをリモートのマネージャから管理する構成

管理対象となる UPS を接続したサーバマシンの台数が 25 台以下であるシステムにおいて、マネージャマシンで各サーバを管理する場合、以下の図のようなシステム構成としてください。それぞれのマシンに各コンポーネントをインストールしてください。

iStorage NS シリーズなどにおいて、Windows 2000 の「ターミナルサービスクライアント」を使用してサーバ管理を行うようなシステムの場合も、ターミナルサーバマシンをマスタサーバマシン（あるいはスレブサーバマシン）として、ターミナル

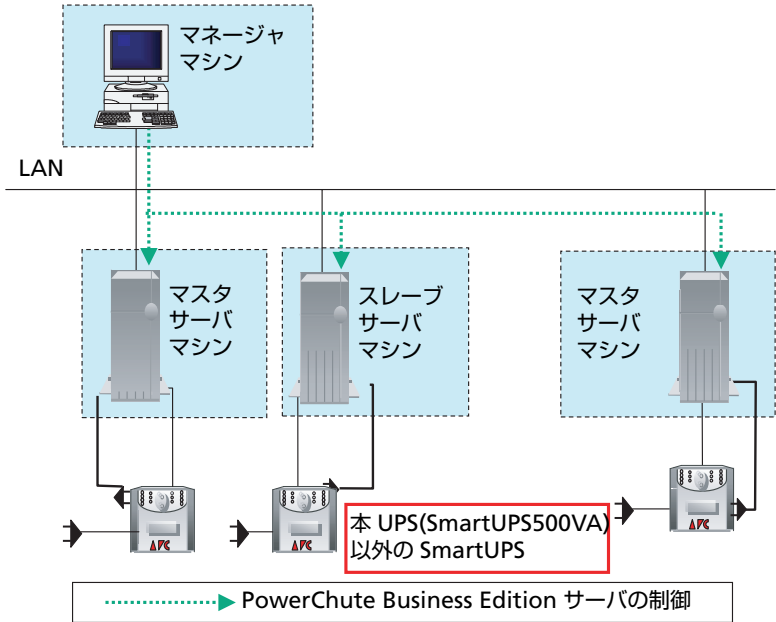
サービスクライアントマシンをマネージャマシンとして、各コンポーネントをインストールしてください。

サーバ/ マネージャ	インストールする コンポーネント	備考
マスタサーバ マシン	PowerChute Business Edition エージェント	<ul style="list-style-type: none"> • Windows サーバを使用 エージェントのインストール時に「Smart-UPS」を選択 • Linux サーバを使用する場合エージェントのインストール時に「pbeagent-7.0.0-419.i386.rpm」を使用
スレーブサーバ マシン	なし	<ul style="list-style-type: none"> • Windows サーバを使用 エージェントのインストール時に「Interface Expander のベーシックポート」または「Share-UPS のベーシックポート」を選択 • Linux サーバを使用する場合エージェントのインストール時に「pbeagent-7.0.0-419.i386.rpm」を使用
マネージャ マシン	PowerChute Business Edition コンソール PowerChute Business Edition サーバ※	

※本 UPS(SmartUPS500VA) はマスタサーバにしか接続できません。スレーブサーバには本 UPS 以外の SmartUPS を購入して接続してください。

※ 2 台以上のマネージャマシンで運用する場合、1 台のマネージャマシンのみに PowerChute Business Edition サーバをインストールしてください。

※本 UPS(SmartUPS500VA) はマスターサーバにしか接続できません。スレーブサーバには本 UPS 以外の SmartUPS を購入して接続してください。



5 PowerChute Business Edition v.7.0 インストール (Windows 版)

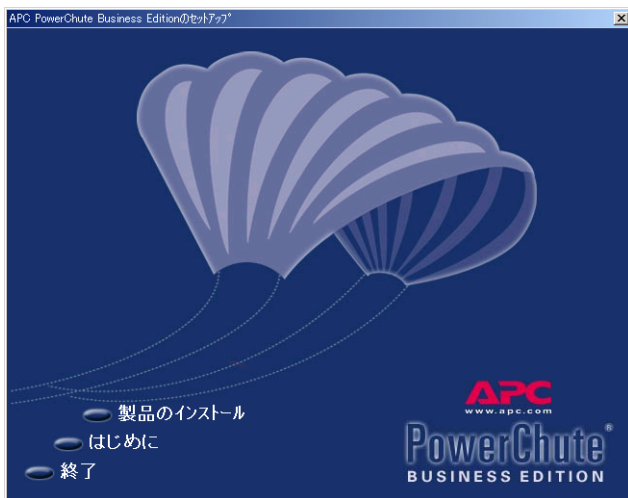
※ すべてのインストール作業は administrators 権限を持つユーザで実施してください。

※ PowerChute Business Edition エージェントがインストールされていない環境ではサーバとUPSをシリアルケーブルで接続しないでください。PowerChute Business Edition エージェントのインストールの際に [APC UPS の通信ポートを自動検出しますか ?] とメッセージボックスが表示されてから (PowerChute Business Edition エージェントのインストール手順④) コンピュータとUPSをシリアルケーブルで接続してください。

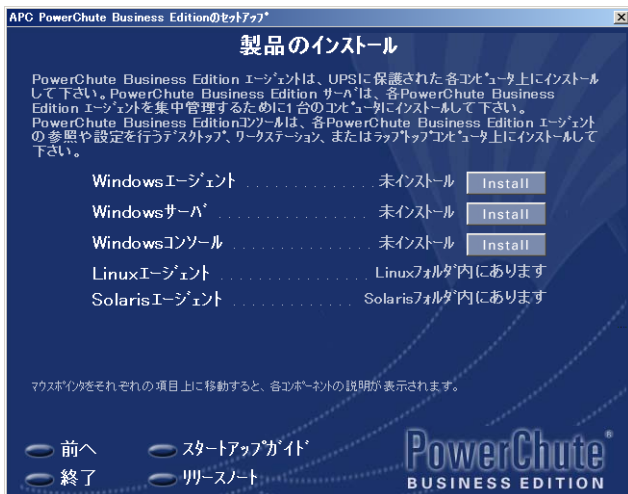
※ UPS をシリアル接続で使用する場合、iStorage NS シリーズでは必ず COM1 をUPS通信ポートとして選択してください。COM2 を通信ポートとして使用することはできません。

1. CD-ROM ドライブに PowerChute Business Edition v.7.0 のCD-ROM 媒体を挿入すると次の画面が表示されます。

自動で表示されない場合は、“E:\Windows\Setup.exe” を実行してください。(例は CD-ROM ドライブが E: の場合です。ご使用の環境に合わせて変更してください。)



2. ここで「製品のインストール」をクリックすると次の画面が表示されます。



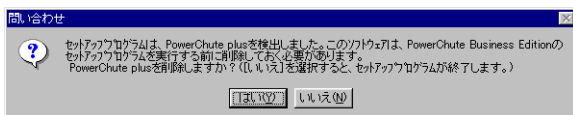
3. インストールする各コンポーネントの「Install」 ボタンを押します。

エージェントのインストール手順は 12 ページの「5.1 PowerChute Business Edition エージェントのインストール」、サーバのインストール手順は 14 ページの「5.2 PowerChute Business Edition サーバのインストール」、コンソールのインストール手順は「20 ページの「5.3 PowerChute Business Edition コンソールのインストール」をそれぞれ参照してください。

※必要な PowerChute Business Edition コンポーネントをサーバにインストールし終えましたら、必ずサーバの再起動を行ってください。

※「Solaris」の表示がありますが、「Solaris」の機能はご使用になれませんので、ご注意ください。

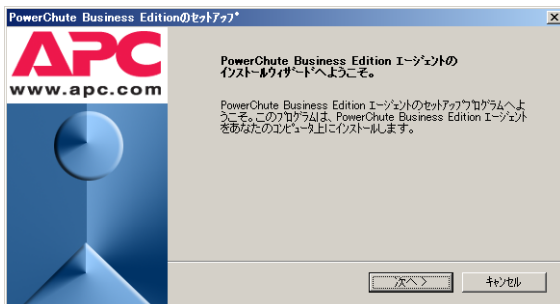
PowerChute plus がインストールされている環境に、PowerChute Business Edition の各コンポーネントをインストールしようすると次の画面が表示されます。(詳細は 84 ページの「15 注意事項」を参照してください)



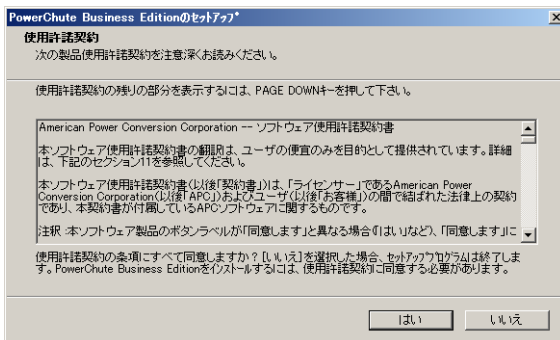
「はい」を選択すると PowerChute plus のアンインストールが開始されます。アンインストールが完了すると PowerChute Business Edition のインストールが開始されます。(「いいえ」を選択すると PowerChute Business Edition のインストールを行うことができません。)

5.1 PowerChute Business Edition エージェントのインストール

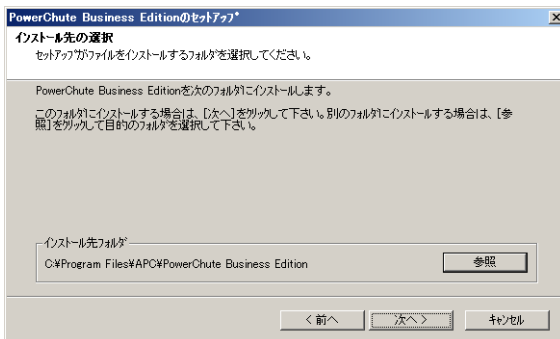
1. エージェントのインストールでは、まず次の画面が表示されます。「次へ」を押します。



2. 製品使用許諾契約が表示されます。使用許諾契約の条項を読み、「はい」を押します。



3. インストール先フォルダを指定します。デフォルトから変更する場合は「参照」を押してフォルダを指定してください。「次へ」を押します。（既にサーバまたはコンソールがインストールされている場合は、この画面は表示されません）



※ インストールフォルダ名にマルチバイト文字（ひらがな、漢字等）を使用すると、WebUIからの設定が正常に行えません。インストールフォルダ名はシングルバイト文字（半角英数字）を使用してください。

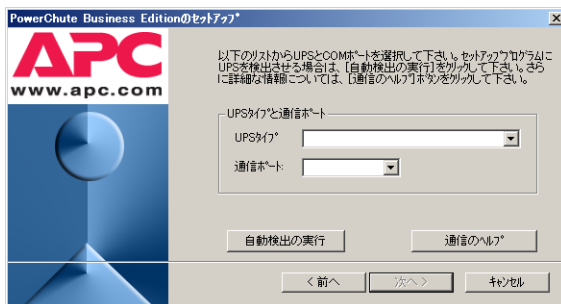
- 以下のメッセージボックスが表示されます。この時点でサーバとUPSをシリアルケーブルで接続してください。自動検出を行わずに「いいえ」を選択してください。



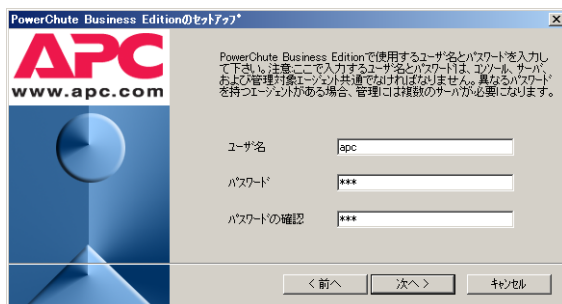
「はい」を押すと検出に失敗しインストールが終了します。必ず「いいえ」を選択してください。

- で「いいえ」を選択するとUPSタイプと通信ポートの選択画面が表示されます。接続されているUPSタイプと通信ポートを選択してください。

UPSタイプは「Smart-UPS」を選択してください。



- エージェントへアクセスするためのユーザ名、パスワードの設定を行います。3~16文字の半角英数文字（大文字・小文字）・記号（% = - ~ ^ @ { [+] } , _ / _ の15文字が使用可能）で、ユーザ名およびパスワードを入力してください。入力完了後に「次へ」を押すとファイルの転送が開始されます。

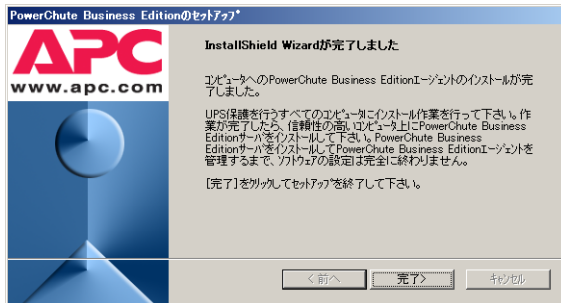


※ここで入力するユーザ名とパスワードは、コンソール、サーバ、および管理対象エージェントで共通でなければなりません。

異なるユーザ名、パスワードを設定したエージェントがある場合、そのエージェントを管理するためには、各エージェントと同一のユーザ名、パスワードを設定した「PowerChute Business Edition サーバ」コンポーネントがインストールされたサーバがそれぞれ必要になります。

また、ユーザ名、パスワードを間違えて入力すると PowerChute Business Edition は正常に動作しません。特に、パスワードは「*」で表示されており、確認することができないので十分に注意して入力を行ってください。

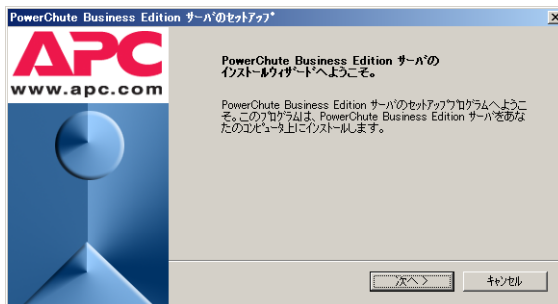
6. エージェントのインストールが完了すると次の画面が表示されます。「完了」を押します。



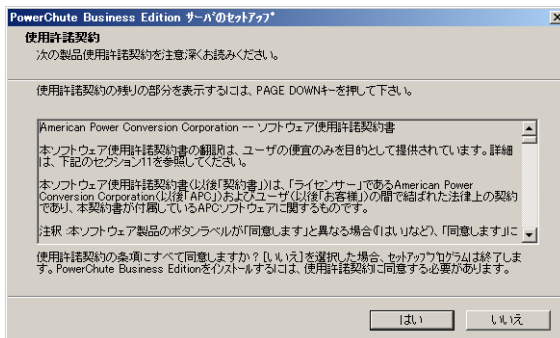
7. 「製品のインストール」の画面に戻ります。エージェントが「インストール済み」となっていることを確認してください。

5.2 PowerChute Business Edition サーバのインストール

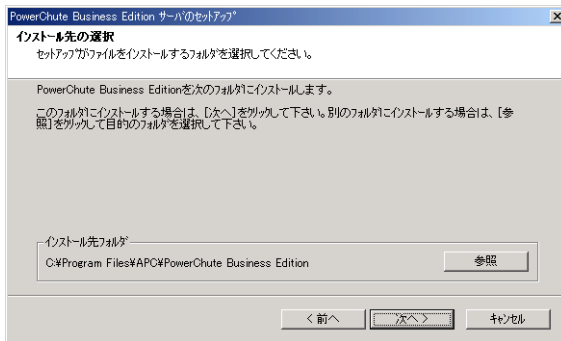
1. サーバのインストールでは、まず次の画面が表示されます。「次へ」を押します。



2. 製品使用許諾契約が表示されます。使用許諾契約の条項を読み、「はい」を押します。

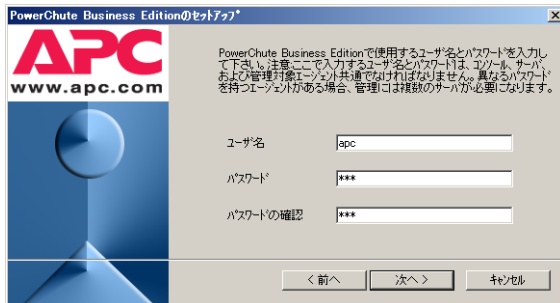


3. インストール先フォルダを指定します。デフォルトから変更する場合は「参照」を押してインストール先のフォルダを指定してください。指定が完了後に「次へ」を押します。(既にエージェントまたはコンソールがインストールされている場合は、この画面は表示されません)



※ インストールフォルダ名にマルチバイト文字(ひらがな、漢字等)を使用すると、WebUIからの設定が正常に行えません。インストールフォルダ名はシングルバイト文字(半角英数字)を使用してください。

4. サーバへアクセスするためのユーザ名、パスワードの設定を行います。3~16文字の半角英数字(大文字・小文字)・記号(% = ~ ^ @ { [+ } , . / _ の15文字が使用可能)で、ユーザ名およびパスワードを入力してください。入力完了後に「次へ」を押すとファイルの転送が開始されます。



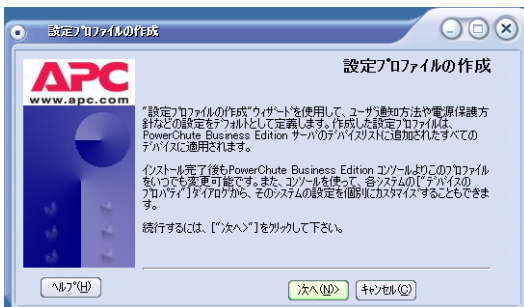
※ ここで入力するユーザ名とパスワードは、コンソール、サーバ、および管理対象エージェントで共通でなければなりません。異なるユーザ名、パスワードを設定したエージェントがある場合、そのエージェントを管理するためには、各エージェントと同一のユーザ名、パスワードを設定した「PowerChute Business Edition サーバ」コンポーネントのサーバがそれぞれ必要となります。

また、ユーザ名、パスワードを間違えて入力すると PowerChute Business Edition は正常に動作しません。特に、パスワードは「*」で表示されており、確認することができないので十分に注意して入力を行ってください。

5. サーバのインストールが完了すると次の画面が表示されます。「完了」を押すと設定プロファイルの作成が始まります。

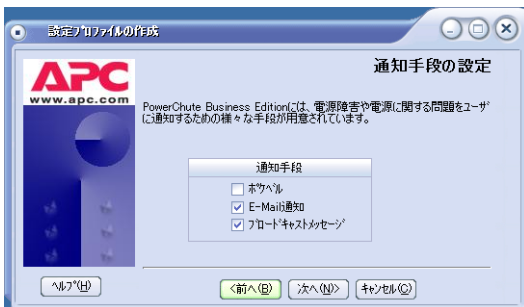


6. 設定プロファイルの作成を行います。次の画面が表示されたら「次へ」を押します。(この設定は後で行うことも可能ですが、ここで設定することをお勧めします。後から設定する場合は、PowerChute Business Edition コンソールにて PowerChute Business Edition サーバに接続し、デバイスリストを設定する際に再び設定プロファイルの作成画面が表示されます。)



7. 電源障害や電源に関する問題を通知する手段を選択します。通知手段は「ポケベル」、「E-Mail 通知」、「ブロードキャストメッセージ」の3通りあります。利用したい通知手段にチェックを入れて「次へ」を押します。ポケベルを選択した場合は 8. へ、E-Mail 通知を選択した場合は 9. へ、ブロードキャストメッセージを選択した場合は 10. へそれぞれ進みます。(複数選択することも可能です。)

通知が必要ない場合は通知手段にチェックを入れずに「次へ」を押して 11. へ進みます。



8. ポケベルを選択すると次の画面が表示されます。ここでは E-Mail をサポートしているポケベルにのみメッセージを送信することができます。「次へ」を押して 9. の E-Mail パラメータの設定に進みます。



9. E-Mail 通知を選択すると次の画面が表示されます。(ポケベルを選択した場合にも表示されます。)画面の例を参考にして、SMTP サーバ名、SMTP ユーザ名 (送信されるメールの "From" 欄に記載される E-Mail アドレスです。SMTP サーバにそのユーザが実在している必要はありません。)、送信先 E-Mail アドレスの登録を行ってください。送信先 E-Mail アドレスは「追加」ボタンを押すことにより登録します (最大 5 つ登録可能です)。

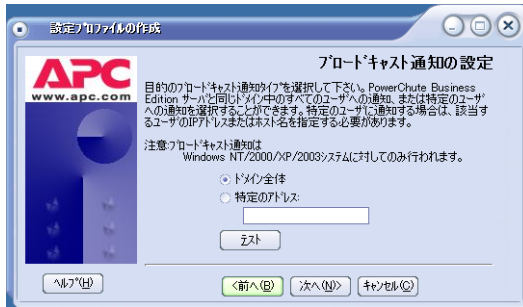
※ PowerChute Business Edition では SMTP 認証等のユーザ認証を行うメール送信はサポートしていません。



設定した内容が正しいかどうかを確認するためには、「テスト」ボタンを押してください。設定内容が正しい場合、以下のように「メッセージ送信完了」と表示され、送信先アドレスにテストメールが送信されます。



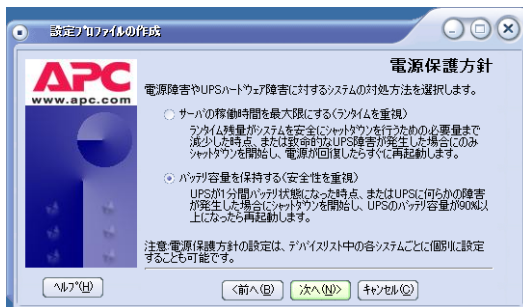
10. ブロードキャストメッセージを選択すると次の画面が表示されます。「ドメイン全体」を選択した場合は、同一ネットワークセグメント内の同一ドメイン全体に通知されます。「特定のアドレス」を選択した場合は、欄に入力したホスト名または IP アドレスに対して通知が行われます。設定した内容が正しいかを確認するためには「テスト」ボタンを押してください。設定が完了したら「次へ」を押します。



※ ブロードキャスト通知により送信されるメッセージをクライアントマシンにて受信するためには、クライアントマシン側にて「Messenger」サービスが起動している必要があります。

※ Windows サーバにのみブロードキャスト通知を行うことが可能です。「特定のアドレス」欄に Linux サーバを指定した場合は通知が行われませんのでご注意ください。

11. 電源保護方針の設定を行います。電源障害や UPS ハードウェア障害に対するシステムの対処方法に応じて、「サーバの稼働時間を最大限にする (ランタイムを重視)」または「安全性を重視」を選択することができます。どちらかを選択し、「次へ」を押します。



- [サーバの稼働時間を最大限にする (ランタイムを重視)] は、システムの運用時間を少しでも長くすることが重要な場合に選択します。この項目を選択した場合、電源障害時に UPS からの電源供給が可能な限りバッテリー動作を行った後、サーバのシャットダウンが開始されます。つまり、UPS のバッテリー残量がシステムを安全にシャットダウンするために必要なランタイムになるまでの間、サーバを稼働し続けます。

電源障害により UPS のシャットダウンが行われた場合、電源が復旧するとすぐに UPS が再起動されます。システムを安全にシャットダウンするために必要な時間はお客様のサーバ毎に異なります。ご使用のサーバのシャットダウン必要時間を計測して、その時間を十分に超える値を設定

してください (50 ページの「10 シャットダウンプロセスについて」を参照)。

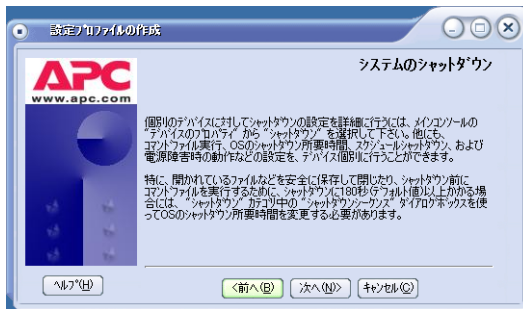
- [安全性を重視] は、システムの動作時間を高めるよりも、バッテリー残量が十分あるうちにデータの保存とシャットダウンを、余裕を持って行いたい場合に選択します。

この項目を選択した場合、電源障害時に UPS のバッテリー状態が 1 分間 (デフォルト値) 継続すると、シャットダウンが開始されます。

電源障害により UPS のシャットダウンが行われた場合、バッテリーが 90% 充電された時点で UPS からサーバへの電源供給が再開されます。

※選択した電源保護方針 や電源障害時のシャットダウン開始時間はインストール後、PowerChute Business Edition コンソールから変更できます。

12. システムのシャットダウンについての説明が表示されます。内容を読んで「次へ」を押します。



13. ここまでに設定した内容が表示されます。内容が正しければ「次へ」を押します。変更が必要な場合は「前へ」を押して変更箇所まで戻り、再度設定を行ってください。



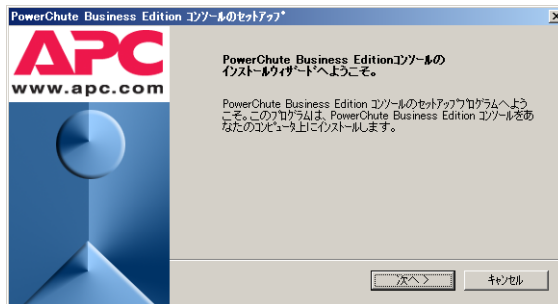
14. 次の画面が表示されると終了です。「完了」を押します。



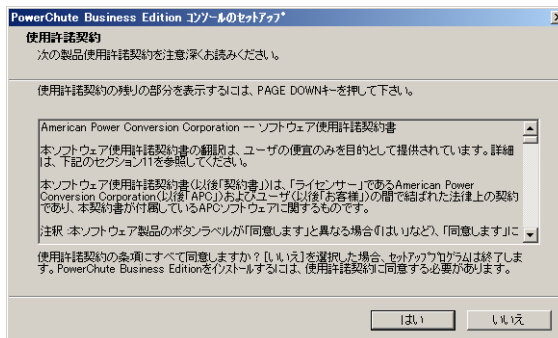
15. 以降、デバイスリストの設定画面が表示されます。操作手順は 29 ページの「8.2 エージェントの登録」を参照してください。
16. デバイスリストの設定が終わると、「製品のインストール」の画面に戻ります。サーバが「インストール済み」となっていることを確認してください。

5.3 PowerChute Business Edition コンソールのインストール

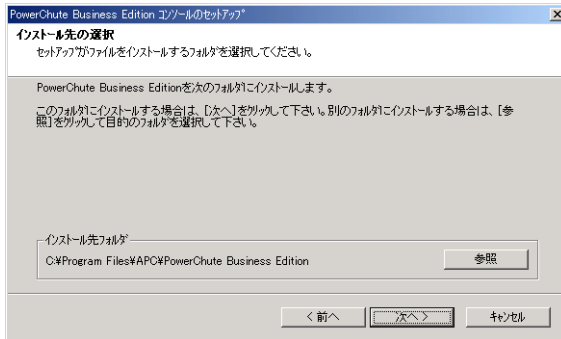
1. コンソールのインストールでは、まず次の画面が表示されます。「次へ」を押します。



2. 製品使用許諾契約が表示されます。使用許諾契約の条項を読み、「はい」を押します。

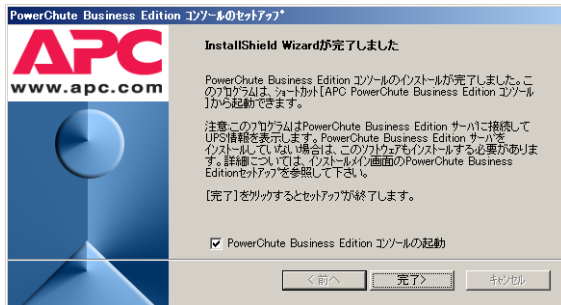


3. インストール先フォルダを指定します。デフォルトから変更する場合は「参照」を押してインストール先フォルダを指定してください。指定が完了後に「次へ」を押すとファイルの転送が開始されます。（既にエージェントまたはサーバがインストールされている場合は、この画面は表示されません）

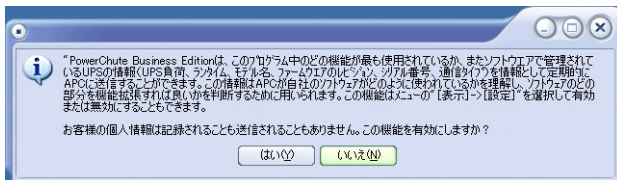


インストールフォルダ名にマルチバイト文字（ひらがな、漢字等）を使用すると、WebUI からの設定が正常に行えません。インストールフォルダ名はシングルバイト文字（半角英数字）を使用してください。

4. コンソールのインストールが完了すると次の画面が表示されます。「完了」を押します。



※インストール後、初めてコンソールを起動した際に次の画面が表示されます。記載されている内容を確認し、「はい」または「いいえ」を選択してください。



5. 「製品のインストール」の画面に戻ります。コンソールが「インストール済み」となっていることを確認してください。

6 PowerChute Business Edition v.7.0 インストール (Linux 版)

※ すべてのインストール作業は root で実施してください。

※ PowerChute Business Edition がインストールされていない環境では、サーバと UPS をシリアルケーブルで接続しないでください。

Linux へは PowerChute Business Edition エージェントのみインストールします。

PowerChute Business Edition エージェントの設定と監視を行うために、PowerChute Business Edition サーバおよび PowerChute Business Edition コンソールが必要となります。

6.1 対象サーバで直接インストール作業を行う場合

※ご使用の環境によっては、メッセージ等の日本語表示ができない場合があります。この場合、「kon」コマンド等で日本語表示モードにすることにより、日本語表示することが可能となります。

1. CD-ROM ドライブに PowerChute Business Edition v.7.0 の CD-ROM 媒体を挿入し「mount」コマンドにて CD-ROM ドライブをマウントします。

例)
`mount /dev/cdrom /mnt/cdrom`

2. 以下のコマンドを実行して PowerChute Business Edition をインストールします。

```
rpm -ivh /mnt/cdrom/Linux/pbeagent-7.0.0-419.i386.rpm
```

※エージェントは "/opt/APC/PowerChuteBusinessEdition/Agent" にインストールされます。

6.2 config.sh による PowerChute Business Edition エージェントの設定

PowerChute Business Edition エージェントをインストール後の設定

22 ページの「6.1 対象サーバで直接インストール作業を行う場合」にて PowerChute Business Edition エージェントを新規インストールした場合は、以下の設定を行ってください。

1. 以下のコマンドを実行してください。

```
/opt/APC/PowerChuteBusinessEdition/Agent/config.sh
```

2. 以下のような表示になります。

最初にユーザ名、パスワードの設定を行います。ユーザ名、パスワードは 3~16 文字の半角英数文字 (大文字・小文字)・記号 (% = - ~ ^ @ { [+] } , . / _ の 15 文字が使用可能) を使用して設定してください。

以下の画面でユーザ名を入力します。

American Power Conversion
PowerChute Business Edition Agent Configuration Utility

New Username

>

ユーザ名を入力すると、次はパスワードの設定になります。以下の表示になりましたら設定するパスワードを入力してください。確認のためにパスワード入力は2回求められます。

※ここで入力するユーザ名とパスワードは、コンソール、サーバ、および管理対象エージェントで共通でなければなりません。異なるユーザ名、パスワードを設定したエージェントがある場合、そのエージェントを管理するためには、各エージェントと同一のユーザ名、パスワードを設定した「PowerChute Business Edition サーバ」コンポーネントがインストールされたサーバがそれぞれ必要になります。また、ユーザ名、パスワードを間違えて入力すると PowerChute Business Edition は正常に動作しません。

注意：パスワード入力の際は **Windows** の時とは異なり「*」も表示されませんのでご注意ください

New Password ← (1 回目入力時)

>

Confirm New Password ← (2 回目入力時)

>

3. 次はシグナルタイプの設定を行います。以下の画面が表示されます。

Select the Signal Type

[1] : Smart

[2] : Simple

>

選択は数字の " 1 " を入力してください。

4. 次は使用するシリアルポートを選択します。以下のように表示されます。

Select the serial port

[1] : /dev/ttyS0

[2] : /dev/ttyS1

[3] : Other

>

シリアルケーブルを接続しているポートが COM1 の場合は「[1] : /dev/ttyS0」、COM2 の場合は「[2] : /dev/ttyS1」、それ以外のシリアルポートに接続している場合は「[3] : Other」を選択してください。ここでの選択も同様に数字の " 1 "、" 2 "、" 3 " のいずれかを入力してください。

<"1" または "2" を選択した場合>

5. の手順に進んでください。

<"3" を選択した場合>

以下の表示になりますので、使用するシリアルポートのデバイス名をキーボード入力してください。

Please type in the serial port

*Case-sensitive (ex: /dev/ttyS0)

>

5. これまで設定してきた内容を確認するメッセージが表示されます。

Signal Type : Smart

Share UPS : No

Serial Port : /dev/ttyS0

Are the UPS settings correct (Yes or No)

>

設定したシグナルタイプ、および使用するシリアルポートの情報が表示されますので、設定内容が正しければ「Yes」、誤りがあり修正をする必要があれば「No」を入力してください。

「No」を入力した場合は 3. の画面に戻りますので、再設定してください。

6. 設定内容確認後に、PowerChute Business Edition エージェントを今すぐ起動させるかどうかの確認メッセージが表示されます。

Start PowerChute Business Edition Agent? (Yes or No)

>

このメッセージが表示されてから、サーバにシリアルケーブルを接続してください。

すぐに PowerChute Business Edition エージェントを起動させる場合は「Yes」、後で手動起動またはサーバを再起動により PowerChute Business Edition エージェントを起動させる場合は「No」を入力してください。

以上で Linux サーバにおけるインストール作業は終了です。後は 29 ページの「8 コンソールの操作」を参照して Linux サーバをデバイスリストに登録してください。

config.sh を使用しての PowerChute Business Edition エージェントの設定変更

[config.sh] による設定変更を行う場合も必ず root 権限にて行ってください。

1. インストール後にユーザ名、パスワード、COM ポートの変更が必要になった場合は、以下のコマンドを実行してください。

```
/opt/APC/PowerChuteBusinessEdition/Agent/config.sh
```

2. 上記コマンド実行後、現在設定されているユーザ名、パスワードの入力を求められます。

American Power Conversion

PowerChute Business Edition Agent Configuration Utility

Username

>

Password

>

3. 正しいユーザ名、パスワードを入力すると現在設定されているユーザ名、パスワードを変更するかどうかの確認メッセージが表示されます。

ユーザ名、パスワードの変更を行われる場合、ユーザ名、パスワードは 3~16 文字の半角英数文字 (大文字・小文字)・記号 (% = - ~ ^ @ { [+] } , . / _ の 15 文字が使用可能) を使用して設定してください。

下記はユーザ名を変更するかどうかの確認です。ユーザ名を変更したい場合は上記メッセージで「Yes」を、変更しない場合は「No」を入力します。

「Yes」を入力した場合は、新しいユーザ名を入力してください。

Would you like to change the current username? (Yes or No)

>

下記はパスワードを変更するかどうかの確認です。パスワードを変更した場合は上記メッセージで「Yes」を、変更しない場合は「No」を入力します。

Would you like to change the current password? (Yes or No)

>

「Yes」を入力した場合は、以下の画面で新しいパスワードを入力してください。パスワードは確認のために、入力を 2 回求められます。

注意：パスワード入力の際は **Windows** の時とは異なり「*」も表示されませんのでご注意ください

New Password ← (1 回目入力時)

>

Confirm New Password ← (2 回目入力時)

>

ここで入力するユーザ名とパスワードは、コンソール、サーバ、および管理対象エージェントで共通でなければなりません。異なるユーザ名、パスワードを設定したエージェントがある場合、そのエージェントを管理するためには、各エージェントと同一のユーザ名、パスワードを設定した「PowerChute Business Edition サーバ」コンポーネントがインストールされたサーバがそれぞれ必要になります。また、ユーザ名、パスワードを間違えて入力すると PowerChute Business Edition は正常に動作しません。間違えて入力した場合は後から確認することができず、エージェントに接続できない等の問題が発生する場合がありますので十分に注意して入力を行ってください。

4. 以降は PowerChute Business Edition エージェントのシグナルタイプ、使用する COM ポートの設定になります。これらの設定については 22 ページの「PowerChute Business Edition エージェントをインストール後の設定」の 3.~6. を参照してください。

7 PowerChute Business Edition v.7.0 アンインストール

本章ではシステムから PowerChute Business Edition v.7.0 を削除する方法について説明します。

※ すべてのアンインストール作業は管理者権限を持つユーザで実施してください。

※ PowerChute Business Edition コンソールを起動し、アンインストールする PowerChute Business Edition エージェントの登録を削除しておいてください。

※ PowerChute Business Edition コンソールは終了させておいてください。リモートサーバからも PowerChute Business Edition サーバへ接続していない状態 (ログアウトした状態) でアンインストールを行ってください。

7.1 OS が Windows の場合 (エージェント、サーバ、コンソール共通)

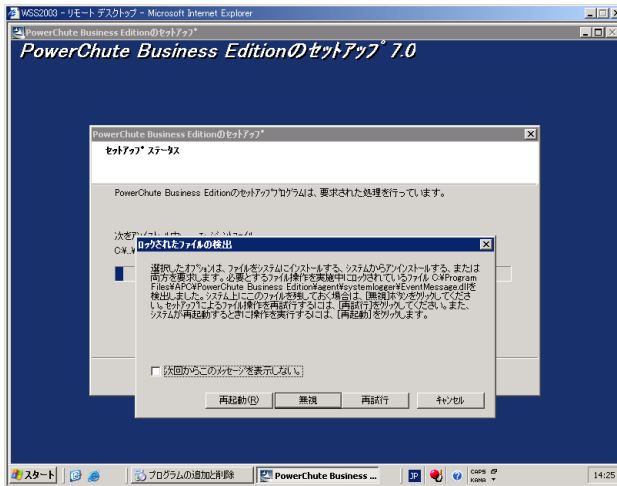
※ iStorage NS シリーズ以外のサーバでは 1. の作業は必要ありません。手順②から作業を開始してください。

1. ご使用の環境が iStorage NS シリーズの場合は、管理 PC から WebUI で iStorage NS にアクセスし、ターミナルサービスを起動します。(以降の作業はすべてターミナルサービス上で実施します。)
2. スタートメニューから [設定] → [コントロールパネル] を選択します。
3. Windows 2000 の場合は「アプリケーションの追加と削除」を実行します。Windows XP または Window Server 2003 の場合は「プログラムの追加と削除」を実行します。
4. 現在インストールされているプログラム一覧の中から、削除したい PowerChute Business Edition コンポーネント (エージェント、サーバ、コンソール) を選択します。
5. OS ごとに以下の手順を実施します。
 - Windows 2000 の場合
「変更 / 削除」ボタンを押します。
 - Windows XP の場合
「削除」ボタンを押します。
 - Windows Server 2003 の場合
「変更と削除」ボタンを押します。
6. 以降、ウィザードの指示に従って作業を進めてください。
7. アンインストールが終了したら必ずサーバに接続しているシリアルケーブルをサーバから抜いてください。ケーブルを抜いたことを確認したら、サーバを再起動してください。

注意 : **PowerChute Business Edition** をアンインストール後、フォルダやファイルがインストールフォルダに残る場合があります。**PowerChute Business**

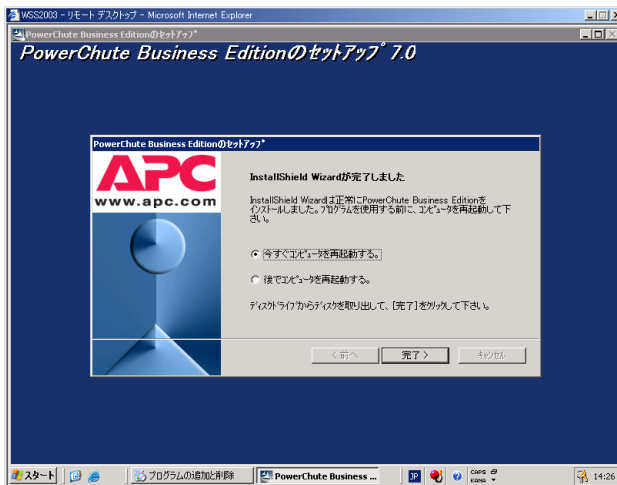
Edition のインストールフォルダを確認し、フォルダの中身とともに削除して下さい。

注意：iStorage NS シリーズでは、エージェントのアンインストール時に次の画面が表示されます。



「再起動」を選択しアンインストールを続行してください。

アンインストールの終了後に次の画面が表示されます。「今すぐコンピュータを再起動する。」または「後でコンピュータを再起動する。」のいずれかを選択し、「完了」を押してください。



「今すぐコンピュータを再起動する。」を選択した場合は「完了」を押すと直ちにサーバの再起動が行われます。「後でコンピュータを再起動する。」を選択した場合は手動でサーバの再起動を行ってください。

7.2 対象サーバで直接アンインストール作業を行う場合 (Linux の場合)

1. 作業はすべて root 権限にて行ってください。一般ユーザにてログインしている場合は、「su -」コマンド等により root 権限になって、以下のコマンドを実行してください。

```
rpm -e pbeagent
```

※上記コマンドを実行した後、PowerChute Business Edition をインストールしたディレクトリ (デフォルト :/opt/APC ディレクトリ配下) にファイルが残っていた場合はファイルを手動で削除してください。

※ アンインストール時、下記メッセージが表示される場合がありますが、PowerChute Business Edition をインストールしたディレクトリ配下のファイルは削除されません。

```
エラー :cannot remove /opt/APC/PowerChuteBusinessEdition/Agent/  
bin - directory not empty
```

```
エラー :cannot remove /opt/APC/PowerChuteBusinessEdition/Agent -  
directory not empty
```

2. プロンプトが表示されるとアンインストールは終了です。アンインストールを終わりましたら、サーバからシリアルケーブルを抜いてください。
3. サーバからシリアルケーブルを抜いた後、サーバを再起動してください。

8 コンソールの操作

8.1 サーバへの接続

コンソールを使用して各エージェントや UPS の設定を行うためには PowerChute Business Edition サーバに接続しなければなりません。以下の手順で接続してください。

※ iStorage NS シリーズ等にインストールされた PowerChute Business Edition コンソールを使用する場合は、あらかじめターミナルサーブスクライアントを使用して対象のサーバに接続しておいてください。

※ Windows 2000 の「ターミナルサーブスクライアント」を使用してターミナルサーバに接続し、PowerChute Business Edition コンソール、デバイスリストウィザード、および設定プロファイルウィザードを起動した場合、画面が正しく表示されません。これは「ターミナルサーブスクライアント」の表示可能色数が少ないために発生します。

1. コンソールを起動すると以下の画面が表示されます。接続するサーバの「ユーザ名」、「パスワード」を入力します。



2. 「ローカルサーバの検出」をクリックするか、PowerChute Business Edition サーバがインストールされているサーバの IP アドレスまたはホスト名を「サーバ」欄に入力します。(過去に接続したことがあるサーバは「サーバ」欄のドロップダウンリストから選択することも可能です。)
3. 以上の操作でサーバに接続し、ログインすることができます。

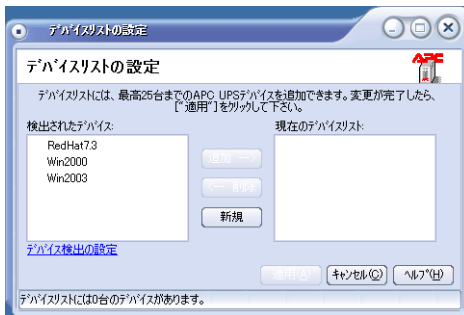
8.2 エージェントの登録

PowerChute Business Edition サーバに管理するエージェントが登録されていない場合、PowerChute Business Edition サーバが管理するエージェントを登録しなければなりません。以下の手順で登録を行ってください。登録後に変更することも可能です。コンソールのメイン画面で [ツール] → [デバイスリストの設定] を選択するか、または、コンソールのデバイスリストフレーム上において、右クリックで表示されるメニューオプションより [デバイスの追加] を選択し、2. 以降の手順を実行してください。

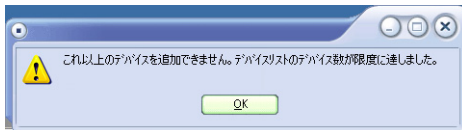
1. コンソールにログインすると次のメッセージが表示されますので「はい」を押してください。「いいえ」を押すと追加せずにコンソールを表示します。



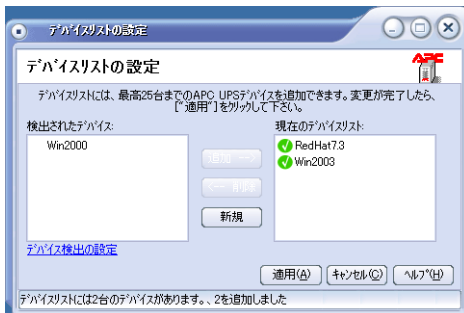
2. デバイスリストの設定画面が表示されます。検出されたデバイス欄に、ネットワーク上の同じ「ユーザ名」、「パスワード」で設定されたエージェントがインストールされているサーバ一覧が表示されます。追加するサーバを選択し、「追加」を押します。



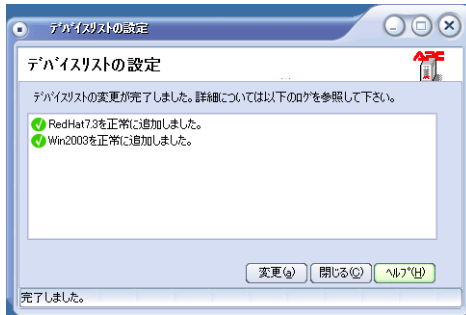
※デバイスリストに登録できるデバイスは最大 25 台です。25 台を超えるデバイスを登録しようとすると、「追加」を押した際に以下のメッセージが表示されます。



3. 現在のデバイスリスト欄に追加したサーバが表示されます。設定を反映するには「適用」を押してください。

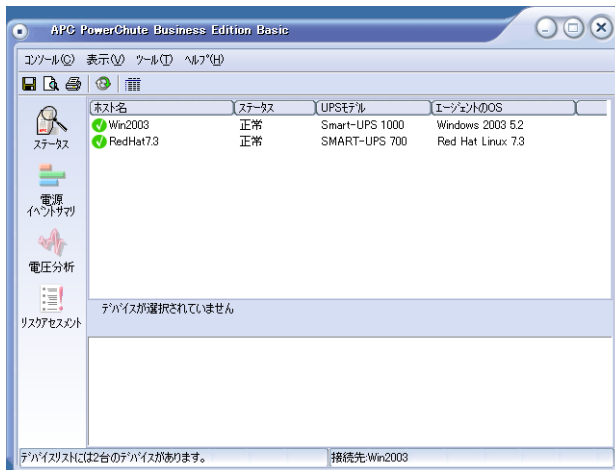


4. デバイスリストへの追加が完了したら次の画面が表示されます。「閉じる」を押して設定画面を終了してください。



※ 既に他の PowerChute Business Edition サーバに監視されているサーバを追加しようとすると次の画面のようにエラーが表示されます。

5. コンソールのメイン画面に戻ります。追加したサーバが表示されていることを確認してください。(PowerChute Business Edition コンソールから、デバイスリストの設定を行った場合以外には以下の画面は表示されません。つまり PowerChute Business Edition サーバインストール時の「デバイスリストの設定」では、以下の画面は表示されません。)



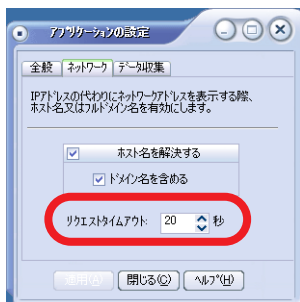
※登録した PowerChute Business Edition エージェントの IP アドレスを変更した場合、デバイスリストから一旦削除して再登録を行わなければなりません。PowerChute Business Edition サーバの IP アドレスを変更した場合は、コンソールでログインする際に「ローカルサーバの検出」を実施するか、変更後の IP アドレスを直接入力しなければなりません。

登録した PowerChute Business Edition エージェントをデバイスリストから削除するには、33 ページの「8.3 エージェントの削除」を参照してください。

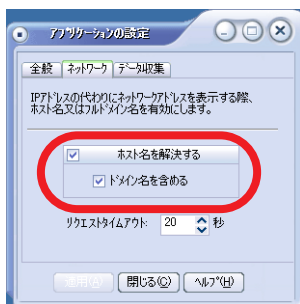
※ PowerChute Business Edition コンソールがインストールされているマシンの IP アドレスの変更は、PowerChute Business Edition コンソールを終了してから行ってください。

※ PowerChute Business Edition コンソールと PowerChute Business Edition サーバ間の通信および、PowerChute Business Edition サーバと PowerChute Business Edition エージェント間の通信には、TCP/IP プロトコルによるソケット通信が使用されます。あらかじめ PowerChute Business Edition コンソールと PowerChute Business Edition サーバ間および、PowerChute Business Edition サーバと PowerChute Business Edition エージェント間で ping コマンドを実行し、共に通信が確立されていることを確認した上でご使用ください。

注意：各サーバがネットワーク上で接続され正常に通信できる状態にもかかわらず、「**PowerChute Business Edition** サーバから応答がありません。」等のメッセージが表示された場合は、コンソールのメイン画面で【表示】→【設定】を選択して次の画面を開きます。「ネットワーク」タブを選択し、リクエストタイムアウト時間を長くしてください。（図の囲まれた部分で設定します。）



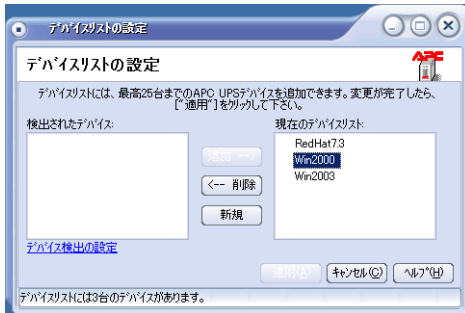
※ [ホスト名を解決する] および [ドメイン名を含める] は、システムのホストアドレスをコンソールでどのように表示するかを設定します。[ホスト名を解決する]のみ有効にした場合、コンソールではホスト名のみを表示します。[ホスト名を解決する]を無効にすると、[ドメイン名を含める]の設定は反映されず、コンソールではIPアドレスのみを表示します。両方を有効にすると（デフォルト）、コンソールではホスト名とドメイン名が表示されます。システムのホスト名が解決できない場合は、IPアドレスが表示されます。



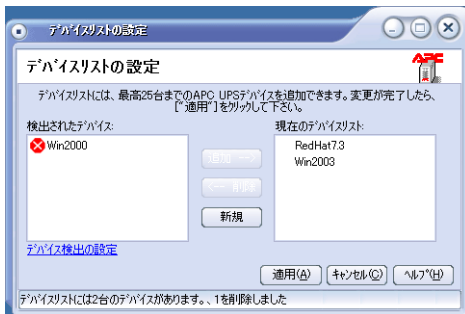
8.3 エージェントの削除

登録した PowerChute Business Edition エージェントをデバイスリストから削除するには、コンソールのメイン画面で [ツール] → [デバイスリストの設定] を選択するか、または、PowerChute Business Edition コンソールのデバイスリストフレーム上で削除したいサーバにカーソルを合わせ、右クリックで表示されるメニューオプションより [デバイスの削除] を選択し、デバイスリストから削除してください。

1. デバイスリストの設定画面が表示されます。現在のデバイスリスト欄に、登録されているエージェントがインストールされているサーバ一覧が表示されます。追加するサーバを選択し、「削除」を押します。



2. 検出されたデバイス欄に削除したサーバが表示されます。設定を反映するには「適用」を押してください。



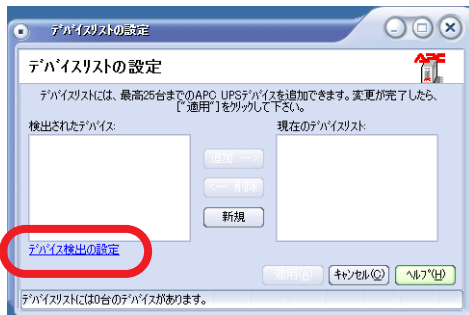
3. デバイスの削除が完了したら「キャンセル」を押して設定画面を終了してください。

8.4 サーバが自動検出されない場合の対処方法

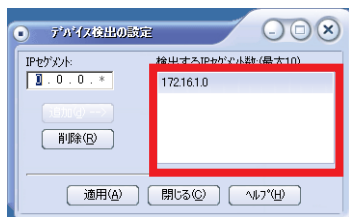
デバイスリストへサーバを追加する際にサーバが自動検出されない場合は、項目 1~3 の確認・修正を行い、自動検出が行われることを確認してください。項目 1~3 の確認で異常がない場合に、自動検出が行われない場合は項目 4 の手順を実施してください。

1. デバイス検出の設定が正しく行われていることを確認してください。

- a. [デバイスの検出の設定] をクリックします。



- b. デバイス検出の設定ダイアログボックスが表示されますので、登録を行いたいサーバが属している IP セグメントの登録が行われていることを確認してください (四角で囲まれた部分を確認します)。登録が行われていない場合には、「IP セグメント」を入力し、[追加] を押します。



2. PowerChute Business Edition サーバがインストールされているマシンから、登録を行いたいマシンに対して ping コマンドを実行しネットワーク接続が確立していることを確認してください。
3. PowerChute Business Edition サーバに設定されている「ユーザ名」、「パスワード」と、追加を行う PowerChute Business Edition エージェントに設定されている「ユーザ名」、「パスワード」が同じものを使用しているか確認してください。

「ユーザ名 / パスワード」の確認方法

<PowerChute Business Edition サーバ>

PowerChute Business Edition コンソールを使用して対象サーバへのログインを行ってください。ログインできない場合は入力したものの以外の「ユーザ名」、「パスワード」が設定されています。

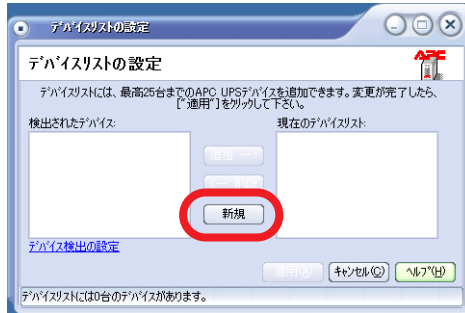
<PowerChute Business Edition エージェント>

WebUIを使用して対象サーバにログインしてください(ログイン方法はインストールガイド 41 ページの「9 WebUI での操作」を参照してくだ

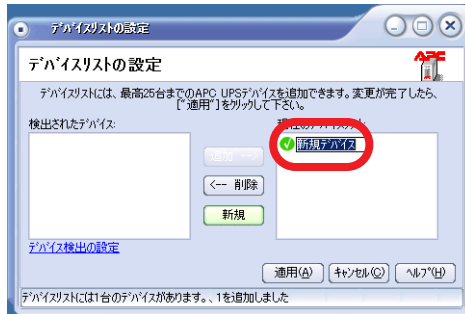
さい)。ログインできない場合は入力したものの以外の「ユーザ名」、「パスワード」が設定されています。

4. 以上 1~3 の確認において異常が見られない場合は、以下の手順にて追加を行ってください。

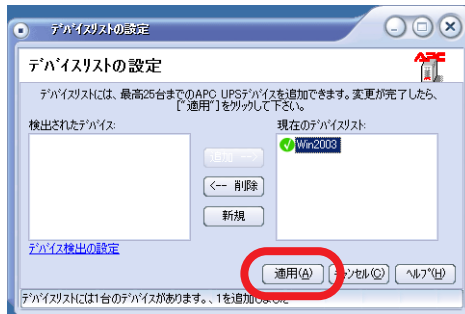
- a. [新規] ボタンを押します。



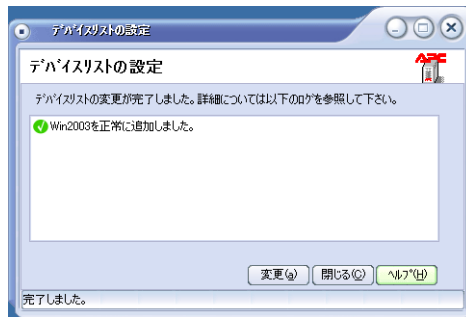
- b. "現在のデバイスリスト" 欄に表示される「新規デバイス」に、追加するホスト名または IP アドレスを入力してください。



- c. [適用] ボタンを押します。



- d. 以下の画面が表示されると追加は完了です。[閉じる] ボタンを押して終了してください。



8.5 エージェント登録時のエラーおよびステータスメッセージ

(1) 設定プロファイルアクセス失敗メッセージ

デバイスリスト設定ウィザードを使って既存のデバイスリストを変更する際に、設定プロファイルが見つからない場合は、次のようなメッセージが表示されます。

メッセージ	説明
デフォルトの設定プロファイルが作成されていません。デバイスをデバイスリストに追加するには、設定プロファイルを作成する必要があります。作成しますか？	設定プロファイルが存在していません。プロファイルを作成する場合は、[はい] をクリックしてください。プロファイルがないと、デバイスリスト設定ウィザードにアクセスすることはできません。
現在の設定プロファイルを取得することができません。PowerChute Business Edition サーバから応答がありません。もう一度実行しますか？	問題が解決しない場合は、39 ページの「(5) 通信障害関連メッセージ」を参照してください。

(2) デバイスリスト設定ウィザードのメッセージ

デバイスリスト設定ウィザードの使用時に表示されるメッセージを次に示します。

メッセージ	説明
デバイスリストの変更は適用されません。本当に終了しますか？	デバイスリストに変更内容を適用する前に [キャンセル] がクリックされました。[はい] をクリックすると、変更内容は破棄されません。
このサーバが管理するデバイスは不明です。PowerChute Business Edition サーバからの応答がありません。	ウィザードを終了した後、再起動してください。それでも問題が解決しない場合は、39 ページの「(5) 通信障害関連メッセージ」を参照してください。

メッセージ	説明
PowerChute Business Edition サーバからの応答がありません。もう一度操作を行ってください。	ウィザードを終了した後、再起動してください。それでも問題が解決しない場合は、39 ページの「(5) 通信障害関連メッセージ」を参照してください。

(3) 検出過程のメッセージ

[検出の設定] ダイアログボックスを使って、検出手順時に検出する IP セグメントのリストを変更する際に表示されるメッセージを次に示します。

メッセージ	説明
次の検出状態を設定できません： PowerChute Business Edition サーバから応答がありません。もう一度実行しますか？	問題が解決しない場合は、39 ページの「(5) 通信障害関連メッセージ」を参照してください。
検出セグメントを判断できません。 PowerChute Business Edition サーバから応答がありません。もう一度実行しますか？	問題が解決しない場合は、39 ページの「(5) 通信障害関連メッセージ」を参照してください。
検出セグメントは 10 個までしか指定できません。	[検出の設定] ダイアログには、すでに PowerChute Business Edition が検出する IP セグメントが限度数まで指定されています。

(4) サマリの変更メッセージ

このログを参照する際には、次のようなログエントリやメッセージが表示されます。

ログエントリ	説明
< ホスト名 > からの応答がありません。	このシステムをもう一度追加してください。それでも問題が解決しない場合は、39 ページの「(5) 通信障害関連メッセージ」を参照してください。
< ホスト名 > は、すでにデバイスリストに存在しています。	システムはすでにデバイスリストに存在しています。
< ホスト名 > がデバイスリストにありません。	システムはデバイスリストからすでに削除されています。
< ホスト名 > を追加しました。	このシステムをデバイスリストに追加しました。
< ホスト名 > を追加できません。すでに < サーバ名 > が管理しています。	このシステムは、他の PowerChute Business Edition サーバのデバイスリストに登録されています。同じシステムを複数の PowerChute Business Edition サーバで監視することはできません。

ログエントリ	説明
< ホスト名 > を追加できません : デバイスの限度数に達しました。	デバイスリストには、すでに PowerChute Business Edition サーバのライセンスで許可されている限度数までのシステムが追加されています。
< ホスト名 > が見つかりません。	PowerChute Business Edition サーバは、このシステムを見つけることができません。システムが存在していない、システムがネットワークに TCP/IP で接続されていない、または PowerChute Business Edition エージェントがシステムにインストールされていない可能性があります。
< ホスト名 > にログインできません。	このシステムの PowerChute Business Edition エージェントは、PowerChute Business Edition サーバと同じユーザ名とパスワードを使用していません。
< ホスト名 > の追加に失敗しました。	このシステムをもう一度追加してください。それでも問題が解決しない場合は、39 ページの「(5) 通信障害関連メッセージ」を参照してください。
設定プロファイルを < ホスト名 > に適用できませんでした。	一般的にこのメッセージは、サポートしていない UPS をシステムが使っていることを示しています。ただし、設定プロファイルの適用時に該当するシステムがシャットダウン中だったり、通信(ネットワークまたはシリアル)が失われた場合にも、このエントリが記録されることがあります。
< ホスト名 > の削除に失敗しました。	このシステムを削除するために、設定ファイルにアクセスすることができません。
< ホスト名 > を削除しました。	このシステムをデバイスリストから削除しました。
< ホスト名 > は省略しました。すでにリストに追加されています。	同じシステムを複数定義しています。例えば、同じシステムをホスト名と IP アドレスの両方で重複して指定しています。

メッセージ	説明
応答しないシステムがあります。デバイスリストを更新します。	すべての変更が成功した訳ではなく、デバイスリストは成功した変更内容だけを反映することを表しています。
デバイスリストの変更が完了していません。本当に終了しますか？	すべての変更が完了しないまま終了しようとしています。[はい] をクリックした場合、正しく変更が完了した設定だけが有効になります。
デバイスリストを更新します。	すべての変更を完了する前にダイアログボックスを終了した場合に表示されます。終了するまでに行った変更内容で、デバイスリストを更新することを表しています。

(5) 通信障害関連メッセージ

問題の原因として以下のことが考えられます。

- ネットワークの混雑またはネットワーク障害により、PowerChute Business Edition コンソールの [アプリケーションの設定] ダイアログボックスにて設定されている、[リクエストタイムアウト時間] に指定された時間 (デフォルトでは 20 秒) が経過する前に、通信障害が発生した。

注意：PowerChute Business Edition コンソールから [リクエストタイムアウト時間] の値を変更することができます。

- 応答を受信する前にネットワーク通信が失われた。
- システムが存在していない、システムが停止している、またはシステムがネットワークから切この断された。
- システムが PowerChute Business Edition エージェントを使用していない、エージェントが動作していない、または PowerChute Business Edition エージェントが PowerChute Business Edition サーバと同じユーザー名とパスワードを使用していない。

<PowerChute Business Edition エージェントサービスの動作状態を確認する方法 >

(Windows の場合)

PowerChute Business Edition エージェントのサービス名は「APC PBE Agent」です。

このサービスの状態が「開始」になっていれば、サービスは動作中です。

[スタート] → [設定] でコントロールパネルを開き、「管理ツール」を選択して「サービス」を選択してください。

(Linux の場合)

Linux サーバにインストールされた PowerChute Business Edition エージェントのサービスが動作している場合、下記ファイルが存在します。そのファイル内に記載されている番号が現在動作中の PowerChute Business Edition エージェントのプロセス ID です。

```
/etc/pbeagent.pid
```

PowerChute Business Edition エージェントが動作しているかどうかを確認するためには、kon コマンド等によりコンソール画面で日本語表示が可能な状態にし、下記コマンドを実行してください。

```
# cat /etc/pbeagent.pid
```

<PowerChute Business Edition が動作中の場合 >

数字 (PowerChute Business Edition のプロセス ID) が表示されますので、以下の例のように「ps (PowerChute Business Edition のプロセス ID)」コマンドを実行してそのプロセスが存在しているかを確認してください。

```
( 例 )  
# cat /etc/pbeagent.pid  
1049
```

```
# ps 1049
PID TTY STAT TIME COMMAND
1049 ? S 0:04 /bin/java/jre/1.4/bin/java
-Dpicard.main.thread=blocking -classpath ./lib/AdvSnmp.jar:./lib/
application.j
```

<PowerChute Business Edition が動作していない場合 >

以下のようなエラーメッセージが表示されます。

```
cat: /etc/pbeagent.pid: そのようなファイルやディレクトリはありません。
```

エラーメッセージが表示された場合は、下記コマンドにより PowerChute Business Edition がインストールされているかの確認も行ってください。

```
# rpm -q pbeagent
```

出力結果にパッケージ名が表示されない場合、PowerChute Business Edition エージェントがインストールされていません。

パッケージ名が表示された場合は、下記コマンドを実行して PowerChute Business Edition エージェントを開始させてください。

```
# /etc/init.d/PBEAgent start
```

注意：**ps** コマンドにて現在動作中の **PowerChute Business Edition** エージェントのプロセス **ID** を確認した場合、ご使用の環境によっては「**/etc/pbeagent.pid**」ファイルに記載されているプロセス **ID** のプロセスと同じようなプロセスが複数表示される場合があります。これは **Java** の仕様によるものであり、**PowerChute Business Edition** の動作に影響はございません。

(例)

```
# cat /etc/pbeagent.pid
1049
# ps awx
PID TTY STAT TIME COMMAND
.....
1049 ? S 0:04 /bin/java/jre/1.4/bin/java
-Dpicard.main.thread=blocking -classpath ./lib/AdvSnmp.jar:./lib/
application.j
.....
1099 ? S 0:00 /bin/java/jre/1.4/bin/java
-Dpicard.main.thread=blocking -classpath ./lib/AdvSnmp.jar:./lib/
application.j
1100 ? S 0:02 /bin/java/jre/1.4/bin/java
-Dpicard.main.thread=blocking -classpath ./lib/AdvSnmp.jar:./lib/
application.j
.....
```


9 WebUI での操作

ブラウザを利用して各エージェントの設定を WebUI から直接行うことにより、コンソールを用いるよりも細かい設定を行うことができます。本章では WebUI の使用方法について説明を行います。

注意：Windows Server 2003 サーバから WebUI を使用して各エージェントの設定を行う場合は、以下の WebUI 操作を行う前に必ず P.105 を参照し、Internet Explorer の設定を確認してください。

注意：MIRACLE LINUX Standard Edition 2.1 サーバから WebUI を使用する場合、画面左側のメニューにおいて全角文字が表示されないことがあります。その場合、Netscape のメニューより【編集】-【設定】を選択し、画面左側のツリー（カテゴリ）より、【表示】-【フォント】を選択します。画面右側の「ドキュメントで他のフォントを使用できるようにする」のチェックを外して下さい。

9.1 Java Runtime Environment の確認

WebUI 機能を利用するためには、クライアントマシンに Java Runtime Environment（以下 JRE と省略）がインストールされている必要があります。また、使用するクライアントマシンの OS により、使用可能な JRE のバージョンが異なります。

- Windows マシンがクライアントの場合、JRE v1.4.1 または v1.4.2 をご使用ください。
- Linux マシンがクライアントの場合、JRE v1.4.1 をご使用ください。

ここではクライアントマシンとして Windows を使用した場合の、JRE の確認手順を示します。以下のいずれかの確認手順により JRE v1.4.1 以降がインストール済みかを確認してください。インストールされていない場合はサン・マイクロシステムズ社の Web サイトよりダウンロードし、インストールしてください。

注意：マイクロソフト社より提供されている「32 ビット Microsoft 仮想マシン」では WebUI 機能を利用できませんのでご注意ください。

<コマンドプロンプトを使用した確認手順 >

コマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行してください。

```
java -version
```

JRE がインストールされている場合、そのバージョン情報が表示されます。



```
Microsoft Windows [Version 5.2.3790]
(C) Copyright 1985-2003 Microsoft Corp.

C:\Documents and Settings\Administrator>java -version
java version "1.4.1_02"
Java(TM) 2 Runtime Environment, Standard Edition (build 1.4.1_02-b06)
Java HotSpot(TM) Client VM (build 1.4.1_02-b06, mixed mode)
```

<Internet Explorer を使用した確認手順 >

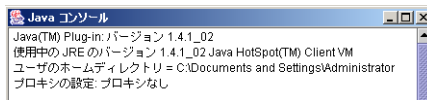
1. Internet Explorer メニュー [ツール] を選択してください。

JRE がインストールされている場合、以下のように「Sun の Java コンソール」メニューが表示されます。「Sun の Java コンソール」が表示されていない場合は、JRE がインストールされていません。



2. 「Sun の Java コンソール」メニューを選択してください。

「Java コンソール」ウィンドウが表示されますので、JRE のバージョンを確認してください。



9.2 エージェントへの接続

ブラウザで「http://IP アドレス:3052」にアクセスします。アドレス中の「IP アドレス」は設定を行いたいエージェントの IP アドレスに置き換えます。エージェントの IP アドレスが 172.16.1.87 の場合は「http://172.16.1.87:3052」にアクセスします。



この画面が表示されたら、エージェントに設定されている「ユーザ名」、「パスワード」を入力し、「ログイン」を押します。

9.3 エージェントの設定

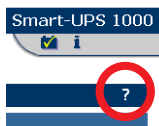
WebUI でエージェントに接続すると次の画面が表示されます。左側のメニュー（四角で囲まれた部分）を利用して、接続された UPS の設定およびイベント発生時の動作設定等を行うことができます。



右上の「i」をクリックすると、画面にヘルプ情報が表示されます。



WebUI の各設定項目については、左側の各メニューを選択後に表示される画面で「?」を選択すると表示されるオンラインヘルプも参照してください。



例として、WebUI で「OS シャットダウン待機時間」の値を変更する手順を次に示します。

「OS シャットダウン待機時間」とは OS がシャットダウンを開始してから、UPS が実際にサポートしている機器への電源供給を停止するまでの時間です。

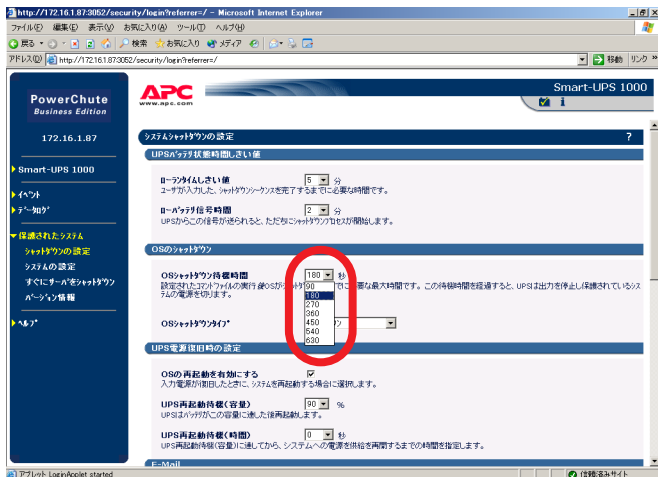
注意：PowerChute Business Edition コンソールからは、【シャットダウン】-【シャットダウンシーケンス】で表示される「OS シャットダウンに必要な時間」で設定します。（詳細については 50 ページの「10 シャットダウンプロセスについて」を参照してください）

左側のメニューで【保護されたシステム】-【シャットダウンの設定】を選択すると以下の画面が表示されます。

「設定」を選択してください。



「OS シャットダウン待機時間」の値を変更する場合、ドロップダウンメニューにより値を選択します。選択可能な値はご使用の UPS 装置に依存いたします。詳しくは UPS 装置添付のマニュアルを参照してください。



変更した後は画面下の『適用』ボタンを押してください。



注意：この『適用』ボタンを押さずに左側の他のメニューを選択すると、変更の内容が反映されません。

『適用』ボタン押下後、以下のような画面が表示されますので、変更が反映されていることを確認してください。



9.4 イベントアクションの設定

各イベントのイベントアクションの設定は WebUI からのみ設定可能です。

左側のメニューの [イベント]-[アクション] を選択し、各イベントのイベントアクションの設定します。

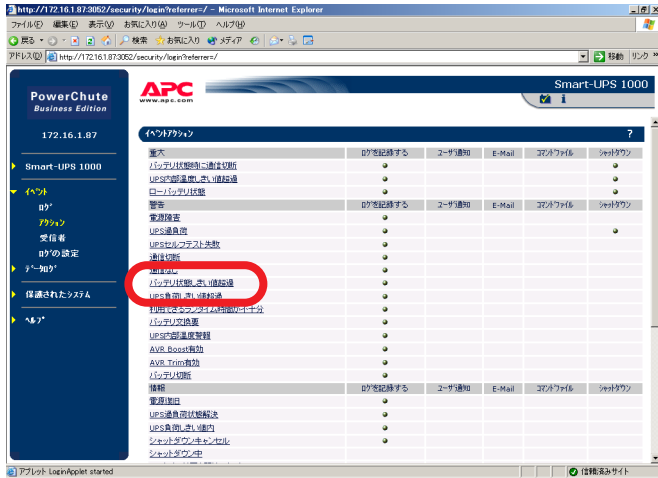
例として、「バッテリー状態しきい値超過」の値を変更する手順を次に示します。



「バッテリー状態しきい値超過」とは停電（電源障害）が発生してから、OS シャットダウンが開始されるまでの時間の設定値です。この値の詳細については 58 ページの「10.4 電源障害時のシャットダウンプロセス（電源保護方針が「安全性を重視」の場合）」を参照してください。

注意：PowerChute Business Edition コンソールでは「詳細項目の表示」チェックボックスをチェックしている状態で、[シャットダウン]-[電源障害] を選択して表示される画面の、「UPS のバッテリー状態が次の時間経過後：」で設定します。

[イベントアクション]-[バッテリー状態しきい値超過] を選択し、必要な設定を行ってください。



「バッテリー状態時間しきい値」の値を変更する場合、ドロップダウンメニューにより値を選択します。



「バッテリー状態しきい値超過」イベントが発生したとき、シャットダウンを実行させるには「シャットダウン」チェックボックスにチェックします。



変更した後は画面下の『適用』ボタンを押してください。

注意：この『適用』ボタンを押さずに左側の他のメニューを選択すると、変更の内容が反映されません。

『適用』ボタン押下後、以下のような画面が表示されますので、変更が反映されていることを確認してください。



イベントアクションの設定として『E-mail通知』や『ユーザ通知』を選択した場合、以下の設定が必要になります。設定に際しては『?』のオンラインヘルプを参照してください。

[保護されたシステム]-[システムの設定]を選択し、「E-mailの設定」を設定してください。

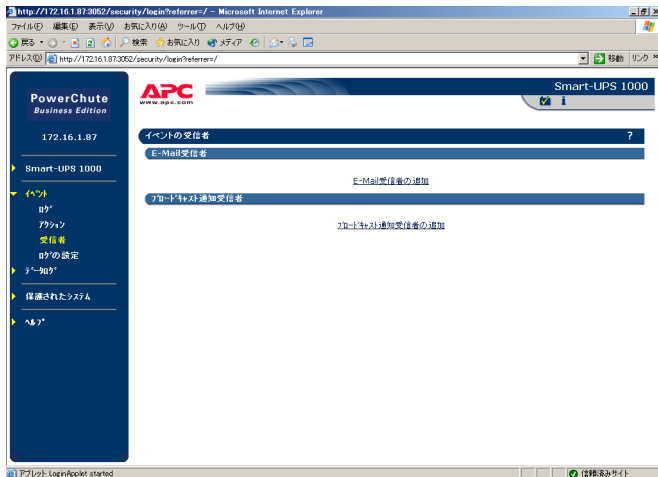
<E-Mail 通知機能について >

- PowerChute Business Edition では SMTP 認証等のユーザ認証を行うメール送信はサポートしていません。
- アカウント名に設定する情報は、E-Mail 通知された際の "From" に入る情報です。ここに設定するアカウント名については、SMTP サーバにそのアカウントが実在している必要はありません。ただし、実在しないアカウントを設定した場合、そのアドレスに対しての返信は行えませんのでご注意ください。



[イベント]-[受信者] を選択し、「E-mail 受信者」、「ブロードキャスト通知受信者」を設定してください。

「ブロードキャスト通知受信者」に設定する情報については「?」を参照してください。



10 シャットダウンプロセスについて

PowerChute Business Edition を使用したシャットダウンプロセスは大きく分類すると以下の 3通りです。

- スケジュールによるシャットダウンプロセス
- 電源障害時のシャットダウンプロセス (電源保護方針が「安全性を重視」の場合)
- 電源障害時のシャットダウンプロセス (電源保護方針が「ランタイム重視」の場合)

これらのシャットダウンプロセスの機能を使用するには、PowerChute Business Edition にて適切な値が設定されていなければなりません。システム環境により、シャットダウンに要する時間やバックアップ時間 (UPS がバッテリー電源を供給できる時間) が異なりますので、環境ごとに適切な値を設定しなければなりません。

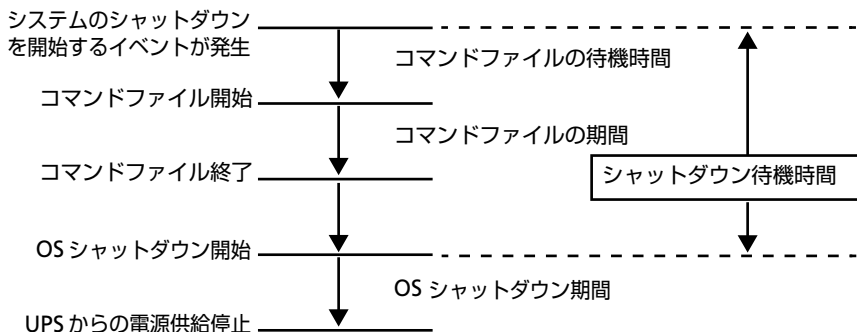
もし適切な値が設定されていない場合、OS のシャットダウン処理が正しく終了する前に UPS からの電源供給が停止し、その結果、システムに重大な障害が発生することがあります。

スケジュールシャットダウン、および電源障害時のシャットダウン処理は「10.1 シャットダウンシーケンスの設定」にて設定した内容に従って行われますので、「10.1 シャットダウンシーケンスの設定」は必ず行ってください。

なお、以降の説明に使用する設定値は説明上のもので、各設定値は環境に合った適切な値を設定してください。

10.1 シャットダウンシーケンスの設定

PowerChute Business Edition によりシステムのシャットダウン処理が開始された場合の、シャットダウン処理の流れは以下のようになります。

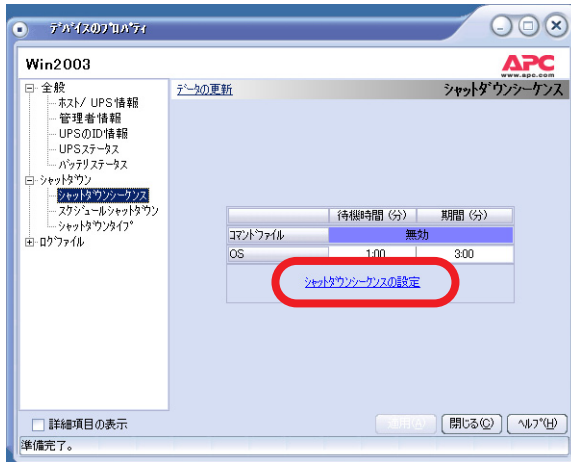


1. シャットダウンシーケンスの設定は、「デバイスのプロパティ」ウィンドウを表示後、[シャットダウン][シャットダウンシーケンス]を選択した以下の画面から設定を行います。

以下の画面は、現在設定されているシャットダウンシーケンスの設定内容になります。

- コマンドファイルは設定されていません（無効）
- OS シャットダウン待機時間は 1 分
- OS シャットダウン期間は 3 分

設定を変更するためには「シャットダウンシーケンスの設定」を選択します。



2. 「シャットダウンシーケンスの設定」ウィンドウが表示されます。最初に OS シャットダウンを行う前に実行させるコマンドファイルの選択をします。特にコマンドファイルを実行させる必要がない場合は「なし」を選択してください。



注意：コマンドファイルを実行する場合は、各エージェントのサーバごとに以下の設定も必要です。

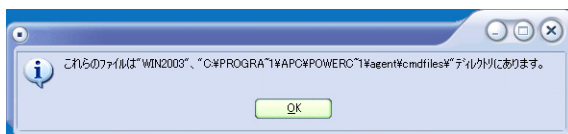
<Windows の場合>

- a. [設定]-[管理ツール]-[サービス]を表示し、「APC PBE Agent」サービスを選択し、右クリックのメニューから「プロパティ」を選択。
- b. " ログオン " タブを選択して、「デスクトップとの対話をサービスに許可」のチェックボックスをオンにします。
- c. 「適用」 ボタンを押し、「OK」 ボタンを押します。

<Linux の場合>

コマンドファイルを作成する場合は root 権限にて行ってください。設定したコマンドファイルには必ず実行権限を与えておいてください。(例 :chmod 700 cmd.sh)

コマンドファイルは「コマンドファイルのディレクトリ」をクリックして表示されるメッセージウィンドウのフォルダに格納されているものが表示されます。



ここでは例として「cmd_file.exe」をコマンドファイルとして設定します。コマンドファイルを選択したら「次へ」 ボタンを押します。



3. 次は「コマンドファイル」および「OS シャットダウン」に関する待機時間、および期間の設定を行います。なお、以降の説明に使用する設定値は説明上のものです。各設定値は環境に合った適切な値を設定してください。また、待機時間、期間の説明は「ヘルプ」ボタンを押して表示されるシャットダウンシーケンスの設定の「待機時間と期間の指定方法」を参照してください。

前のコマンドファイル選択画面において、コマンドファイルを設定していた場合、上記のような画面表示になります。コマンドファイルの選択画面にて「なし」を選択していた場合、上記画面において「コマンドファイル」が表示されません。

「待機時間」、「期間」は表示されているバーグラフの、各「バー」をマウスのドラッグ操作等により設定します。設定した内容は下の「待機時間」、「期間」の欄に表示されます。

また、(a)にて時間設定をする対象 (OS または、コマンドファイル) を選択し、(b)にて「待機時間」、(c)にて「期間」をそれぞれ「▲」や「▼」ボタンを押すことで設定することもできます。

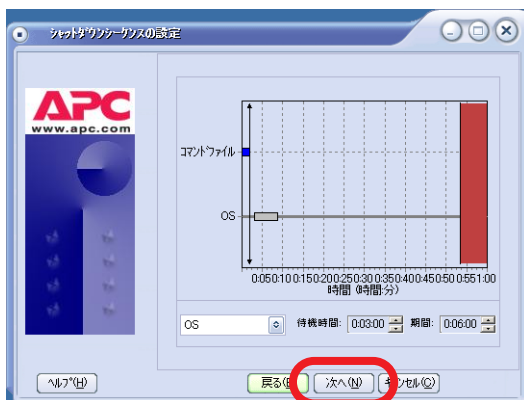
重要：OS シャットダウンの「期間」に設定する値について

この値は、OS シャットダウン開始後、UPS 装置からの電源供給が停止するまでの時間についての設定項目になります。この値を設定する前に実環境のサーバを使用して、OS がシャットダウンに要する時間を何回か測定し、その結果を十分に超える値を設定してください。

この設定値が短い場合、シャットダウン途中で UPS 装置からの電源供給が停止され、システムに重大な障害が発生する可能性があります。

注意：OS シャットダウン待機時間の値は「コマンドファイル待機時間」、「コマンドファイル期間」に設定した時間も加えられます。

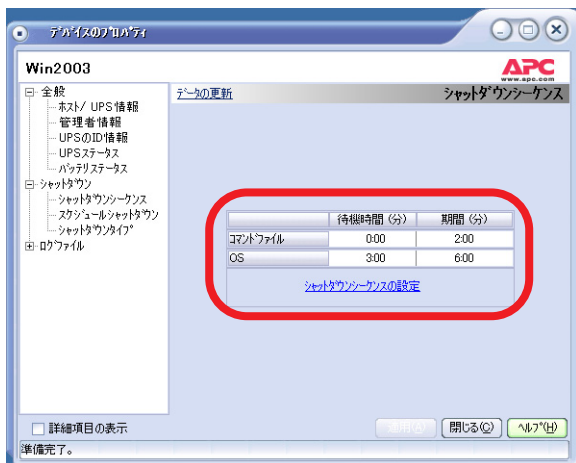
4. 設定を終えたら「次へ」ボタンを押してください。



5. 「完了」ボタンを押して「シャットダウンシーケンスの設定」ウィンドウを閉じます。



6. 設定した内容が正しく反映されているかを確認してください。

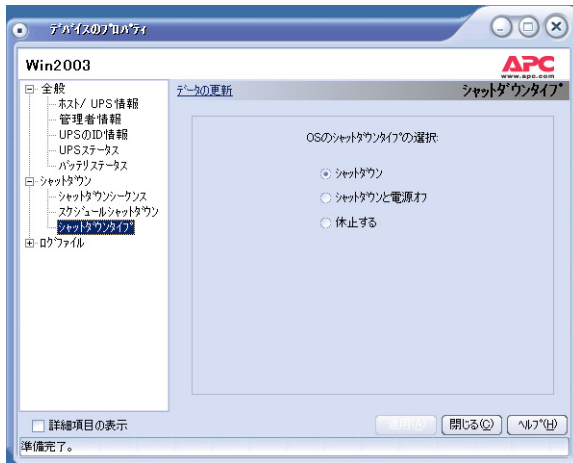


10.2 シャットダウンタイプの設定 (Windows サーバのみ)

PowerChute Business Edition エージェントがインストールされているサーバが Windows サーバの場合、シャットダウンタイプの選択ができます。シャットダウンタイプを変更することで PowerChute Business Edition により行われるシャットダウン動作を、シャットダウン、シャットダウンと電源オフ、休止する のいずれかに設定することができます。各シャットダウンタイプについては、以下を参照してください。

- 「シャットダウン」を選択した場合
- 「シャットダウンと電源オフ」を選択した場合
- 「休止する」を選択した場合

シャットダウンタイプを設定するには、PowerChute Business Edition コンソールから対象の PowerChute Business Edition エージェントを選択し、「デバイスのプロパティ」ウィンドウを表示したあと、[シャットダウン]-[シャットダウンタイプ]を選択してください。



WebUIから設定する場合は [保護されたシステム]-[シャットダウンの設定] を選択し、「OS シャットダウンタイプ」にて設定します。

「シャットダウン」を選択した場合

PowerChute Business Edition エージェントのデフォルト設定です。PowerChute Business Edition により OS シャットダウンが行われた後、サーバはすぐに電源オフされません（※）。サーバの電源は、OS のシャットダウン処理が開始されてから「10.1 シャットダウンシーケンスの設定」の OS シャットダウン期間にて設定した時間が経過した後、UPS 装置からの電源供給が停止されることで、電源オフされます。

電源障害によるサーバシャットダウン後、電源回復によるサーバの自動起動、およびスケジュール設定をすることによるサーバの自動運転を行う場合は、このシャットダウンタイプにて運用することをお奨めいたします。

※ Windows XP Professional SP1a を適用済み、および Windows Server 2003 の環境では、「シャットダウン」を選択した場合でも OS シャットダウン後、直ちにサーバの電源がオフされます。

「シャットダウンと電源オフ」を選択した場合

PowerChute Business Edition により OS シャットダウンが行われた後、直ちにサーバの電源がオフされる設定です。このシャットダウンタイプを選択している場合、サーバ装置の BIOS にて設定する「AC-LINK」の設定が「Power ON」であるか、それ以外になっているかにより、UPS から電源供給が再開した後の動作が異なります。

< 「Power ON」 に設定している場合 >

UPS 装置からの電源供給が再開されると、サーバも自動起動されます。

< 「Power ON」以外に設定している場合 >

UPS 装置からの電源供給が再開された後も、サーバは自動起動されない場合があります。サーバが起動していなかった場合、起動するためにはサーバの電源スイッチを手動オンしていただく必要があります。

重要：このシャットダウンタイプを選択し、かつ「AC-LINK」の設定を「Power ON」以外に設定している場合、電源障害によるサーバシャットダウン後の電源回復によるサーバの自動起動や、スケジュール運転によるサーバの自動運転が行えませんので、本事項を十分にご理解の上でご使用ください。

「休止する」を選択した場合

このシャットダウンタイプを選択することで、PowerChute Business Edition によりシャットダウン処理が行われた場合、サーバを休止状態にすることができます。ただし「休止する」を選択するためには、ご使用の環境において休止状態が使用可能であることが条件となります。使用可能かどうかを判断するためには [コントロールパネル]-[電源オプション] を選択してください。「休止状態」タブが表示されており、そのタブを選択して「休止状態を有効にする」のチェックボックスがオンになっていれば、休止状態が使用できます。

ただし「休止状態」を使用する場合、ご使用のハードウェア、OS、アプリケーションにおいて「休止状態」を使用することにより問題が発生しないことを十分に確認してください。

重要：シャットダウンタイプを「休止する」にして運用する場合、以下の制限事項がありますのでご注意ください。

- Windows 2000 環境において、休止状態からのウエイク後キー・マウスインプットなどを行わずに放置しアイドル状態が 5 分続くと、再び休止状態に入りそれ以降 PowerChute Business Edition エージェントサービスは動作しません。（詳細はマイクロソフト社のサポート技術情報 KB282208 を参照してください）

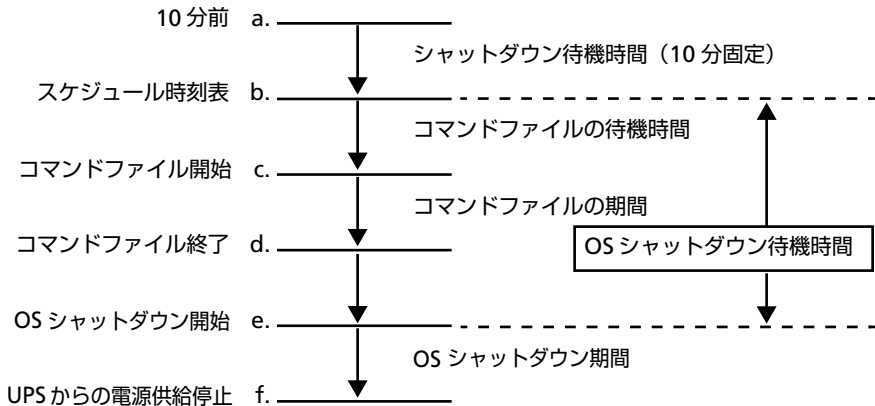
上記現象によりサーバが再び休止状態になった場合、サーバは休止状態から自動復旧されず、手動にて休止状態から復旧させる必要があります。停電またはスケジュールによるサーバの自動運用を行う場合は、「休止する」を使用しないことをお奨めします。

- Windows XP Professional 環境において、休止状態からのウエイク後キー・マウスインプットなどを行わずに放置しアイドル状態が 5 分続くと、再び休止状態に入りそれ以降 PowerChute Business Edition エージェントサービスは動作しません。（詳細はマイクロソフト社のサポート技術情報 KB318355 を参照してください）

上記現象によりサーバが再び休止状態になった場合、サーバは休止状態から自動復旧されず、手動にて休止状態から復旧させる必要があります。停電またはスケジュールによるサーバの自動運用を行う場合は、「休止する」を使用しないことをお奨めします。

10.3 スケジュールによるシャットダウンプロセス

ここではスケジュールによるシャットダウンが開始された場合の、シャットダウンの流れを説明します。シャットダウンのスケジュール設定方法については、54 ページの「10.2 シャットダウンタイプの設定 (Windows サーバのみ)」にて説明しています。



- a. スケジュール設定時刻の 10 分前に「<日時>に設定されている管理上のシャットダウンが開始されました。」とメッセージ通知を行う
- b. コマンドファイルの待機
- c. コマンドファイルの実行開始
- d. コマンドファイルが終了し、OS シャットダウン待機時間が経過するまで待機する
- e. OS のシャットダウンが開始される
- f. UPS からの電源供給が停止する

設定項目

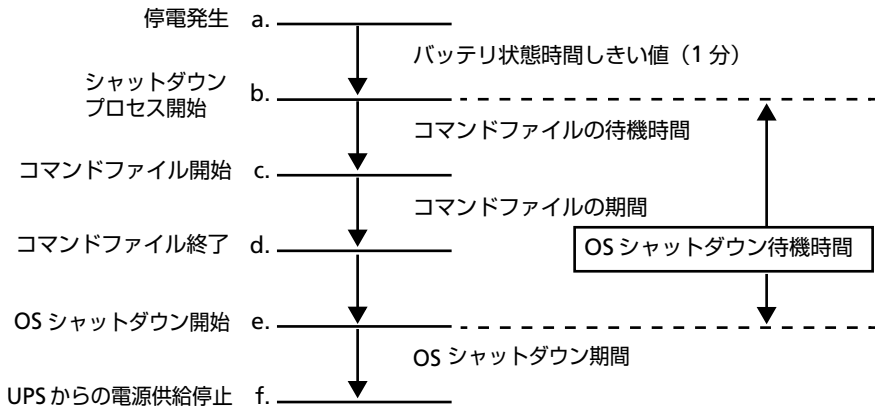
- シャットダウン待機時間

PowerChute Business Edition がスケジュールによるシャットダウンプロセスを開始するまでの待機時間です。10 分で固定されています。

- コマンドファイル待機時間、期間・OS シャットダウン待機時間、期間

「シャットダウンシーケンスの設定」にて設定した時間によってシャットダウン処理が行われます。まだシャットダウンシーケンスの設定を行っていない場合は必ず 50 ページの「10.1 シャットダウンシーケンスの設定」を参照して設定を行ってください。

10.4 電源障害時のシャットダウンプロセス (電源保護方針が「安全性を重視」の場合)



- a. 停電 (電源障害) 発生。以降 UPS はバッテリーによる電源供給を行う
- b. バッテリー状態時間しきい値を超過したので、シャットダウンプロセスが開始される
- c. コマンドファイルが開始される
- d. コマンドファイルが終了され、OS シャットダウン待機時間が経過するまで待機する
- e. OS のシャットダウンが開始される
- f. UPS からの電源供給停止する

※ a.~f. の間に復電した場合、サーバのシャットダウンはキャンセルされます。

注意：a.~f. の間に UPS がローバッテリー状態またはランタイム残量がローランタイムしきい値以下になった場合のシャットダウンプロセスは、60 ページの「10.5 電源障害時のシャットダウンプロセス (電源保護方針が「ランタイム重視」の場合)」と同様になります。

重要：すべての時間の合計 ($(\text{バッテリー状態時間しきい値}) + [\text{OS シャットダウン待機時間}] + [\text{OS シャットダウン期間}]$) が UPS の残りバックアップ時間 (UPS がバッテリー電源を供給できる時間) を超えないように設定してください。バックアップ時間を超える値を設定した場合、OS のシャットダウン完了までバッテリー電源による供給ができません。

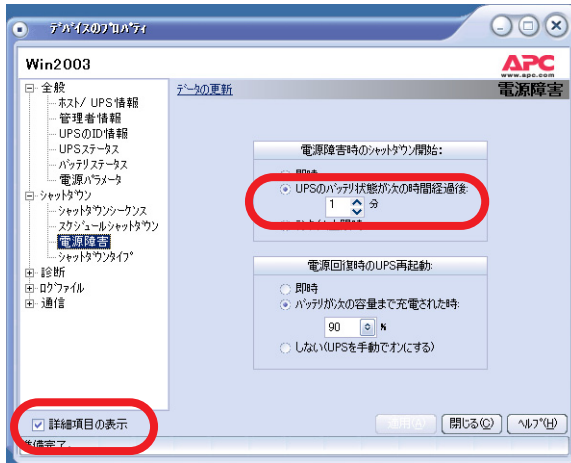
重要：コマンドファイル待機時間、期間・OS シャットダウン待機時間、期間は、「10.1 シャットダウンシーケンスの設定」にて設定した時間に従ってシャットダウン処理が行われます。まだシャットダウンシーケンスの設定を行っていない場合は必ず 50 ページの「10.1 シャットダウンシーケンスの設定」を参照して設定を行ってください。

設定項目

● バッテリ状態時間しきい値

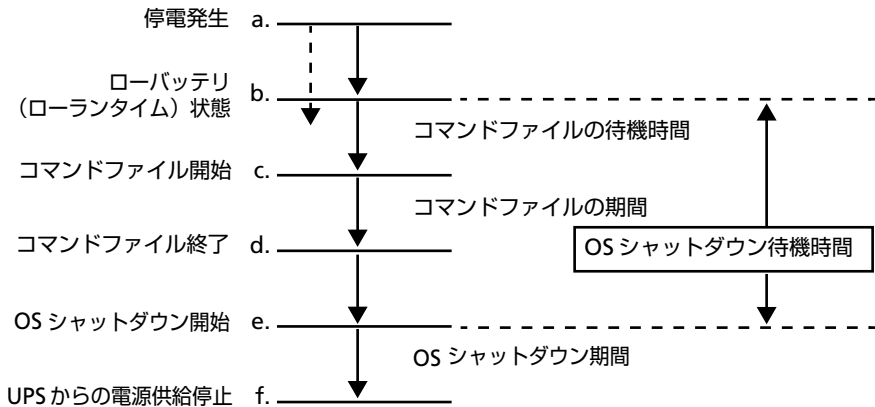
停電（電源障害）が発生してから、OSのシャットダウンが開始されるまでの時間を設定します。

コンソールからは、プロパティを開き [シャットダウン]-[電源障害] で、[UPSのバッテリー状態が次の時間経過後] タブを選択して時間を設定します。[電源障害] ツリーはプロパティ画面左下の「詳細項目の表示」にチェックを入れると表示されます。（下図参照）



WebUI からは [イベント]-[アクション]-[バッテリー状態しきい値超過] を選択し、「バッテリー状態しきい値」を設定します。

10.5 電源障害時のシャットダウンプロセス (電源保護方針が「ランタイム重視」の場合)



- a. 停電 (電源障害) 発生。以降 UPS はバッテリーによる電源供給を行う
- b. バッテリからの電源供給が可能な時間が、[ローバッテリー信号時間] の設定時間または [ローランタイムしきい値] まで低下したためにシャットダウンプロセス開始が開始される
- c. コマンドファイルが開始される
- d. コマンドファイルが終了され、OS シャットダウン待機時間が経過するまで待機する
- e. OS のシャットダウンが開始される
- f. UPS からの電源供給停止する

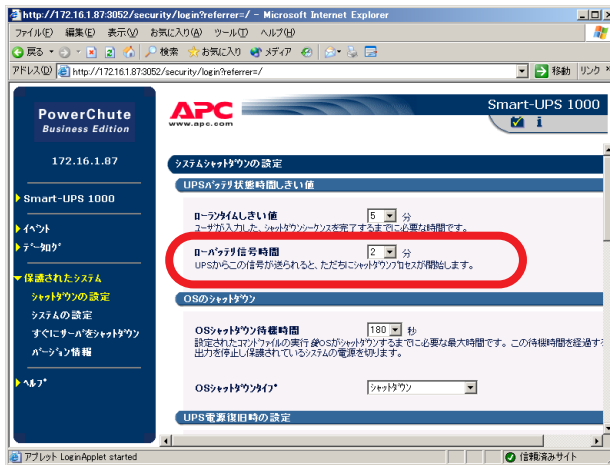
注意：[ローバッテリー信号時間] の考え方については、※ **1(76 ページ)** を参照願います。

重要：コマンドファイル待機時間、期間・OS シャットダウン待機時間、期間は、「**10.1 シャットダウンシーケンスの設定**」にて設定した時間に従ってシャットダウン処理が行われます。まだシャットダウンシーケンスの設定を行っていない場合は必ず **50 ページ** の「**10.1 シャットダウンシーケンスの設定**」を参照して設定を行ってください。

設定項目

● ローバッテリー信号時間

WebUI からのみ設定することができます。[保護されたシステム]-[シャットダウンの設定] を選択して [設定] を押します。表示される設定画面で [ローバッテリー信号時間] を設定します。(下図参照)



● ローランタイムしきい値

コンソールでは [OS のシャットダウンに必要な時間] の設定値と [コマンドファイル実行所要時間] の設定値から自動で設定されます。ただし、最低設定値は 5 分になります。

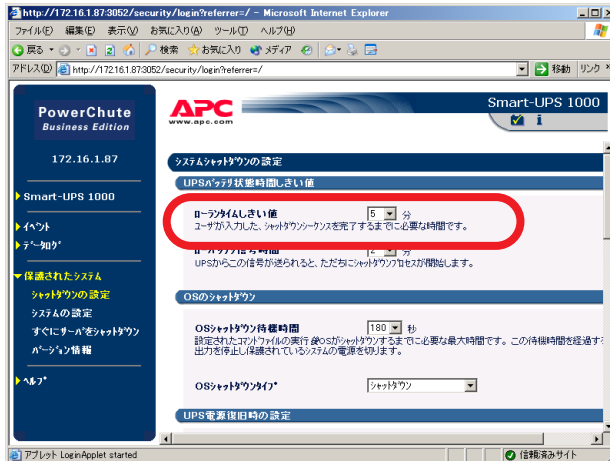
例えば

OS のシャットダウンに必要な時間 :180 秒

コマンドファイル実行所要時間 :5 分

に設定した場合、ローランタイムしきい値は 8 分に設定されます。

WebUI からは任意の値を設定することができます。[保護されたシステム]-[シャットダウンの設定] を選択して [設定] を押します。表示される設定画面で [ローラタイムしきい値] を設定します。(下図参照)



※ 1 参考 [ローバッテリー信号時間] について

例えば UPS バッテリ能力が弱っている場合、UPS バッテリの電源供給可能時間が、58 ページの「10.4 電源障害時のシャットダウンプロセス (電源保護方針が「安全性を重視」の場合)」で設定した [バッテリ状態時間しきい値]+[OS シャットダウン待機時間]+[OS シャットダウン期間] の合計時間より少なくなる場合があります。このような状態の UPS がシャットダウンプロセスを実施した場合、正常にシャットダウンが完了する前に、UPS バッテリの電源供給が停止してしまいます。それを防止するために、PowerChute Business Edition は UPS バッテリの電源供給可能時間が、[ローバッテリー信号時間] として設定されている時間以下になった時に OS のシャットダウンを開始します。

[ローバッテリー信号時間] は、[OS シャットダウン期間] より大きい時間を設定する必要があります。

現時点でのバックアップ時間を表示するには、コンソールからはプロパティを開き、[全般]-[バッテリステータス]を選択し、[ランタイム残量]によって確認することができます。(下図参照)



WebUI では [Smart-UPS 1000]-[システムステータス] を選択し「ランタイム残量」を確認します。(使用する UPS タイプが Smart-UPS 1000 の場合です。)

11 スケジュールシャットダウンの設定

PowerChute Business Edition ではサーバのシャットダウンに日時および再起動日時を設定することによるスケジュール運転ができます。

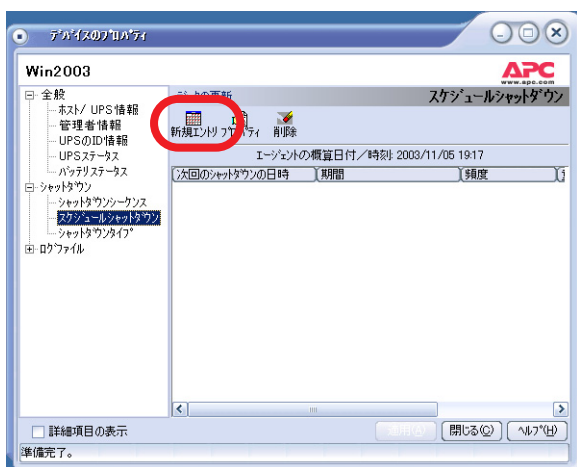
注意：スケジュール運転は『PowerChute Business Edition コンソール』でのみ設定することができます。WebUI ではスケジュール運転を設定することができません。

以下、スケジュール運転の設定方法を説明します。

1. PowerChute Business Edition コンソールに表示されているサーバで、スケジュールを設定するサーバを選択して、「デバイスのプロパティ」ウィンドウを表示してください。

ウィンドウが表示されたら、[シャットダウン]-[スケジュールシャットダウン] を選択してください。

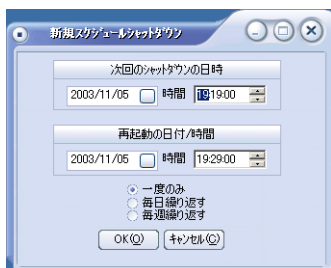
すると以下のような画面が表示されます。「新規エントリ」ボタンを押してください。



「新規スケジュールシャットダウン」ウィンドウが表示されますのでここでシャットダウンをする日時を設定してください。

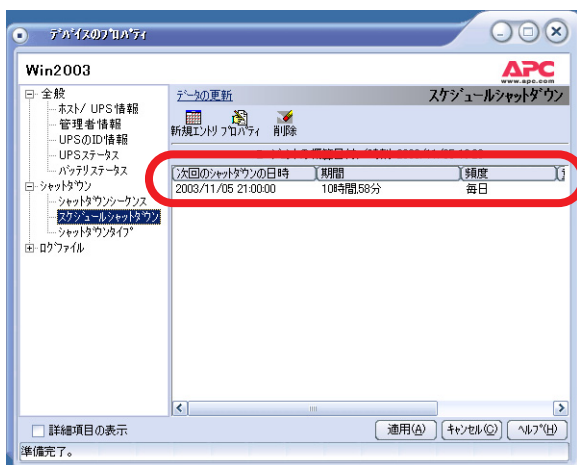
< 「再起動の日付 / 時間」の「時間」の設定について >

再起動の時間は、「次回のシャットダウンの日時」に設定した日時から「10.1 シャットダウンシーケンスの設定」の『OS シャットダウン待機時間』+ 『OS シャットダウン期間』+ 6分単位で設定します。



2. スケジュールの日時を設定後に「OK」ボタンを押すと、再び「デバイスのプロパティ」ウィンドウに戻ります。このとき先に登録したスケジュールの情報が画面内に表示されますので、登録内容に誤りがないかを確認してください。スケジュールを追加する場合は同様に「新規エントリ」ボタンにて追加を行ってください。

注意：スケジュールシャットダウンの「期間」の欄に表示される時間は「10.1 シャットダウンシーケンスの設定」において設定する『コマンドファイルの待機時間』、『コマンドファイルの期間』、『OS シャットダウン待機時間』、『OS シャットダウン期間』の値と連動します。それらの設定値を変更すると、その値に応じて下記の「期間」に表示される時間が増減します。

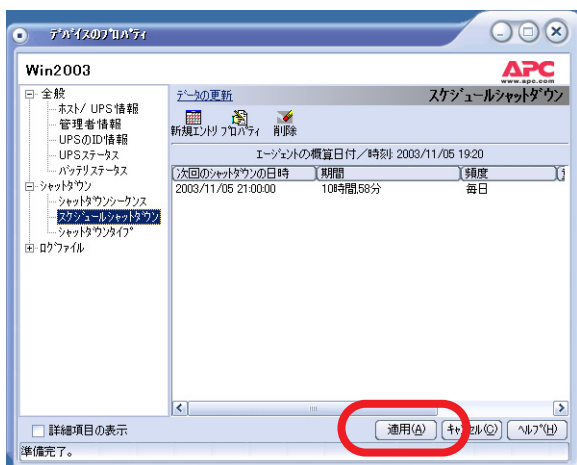


注意：すでに登録されているスケジュールと、新たに追加（あるいは編集）したスケジュールの登録内容に重複している部分がある場合、以下のように「重複する日時」の欄に登録したスケジュールに関する日時が表示されます。この「重複する日時」に表示されている行のスケジュールは実行されません。

次回のシャットダウンの日時	期間	頻度	重複する日時
2003/11/07 21:00:00	2日 10時間56分	毎日	2003/11/21 21:00:00
2003/11/21 21:00:00	3日 10時間56分	一度	

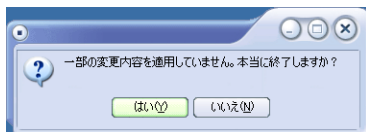
重複した日時のスケジュール登録を行った場合の動作については、「ヘルプ」ボタンを押して表示されるヘルプの「重複したスケジュールシャットダウン」に記載された内容をご確認ください。

3. 必要なスケジュールの登録がすべて終わりましたら、最後に「適用」ボタンを押してください。「適用」ボタンを押すと設定したスケジュールが対象サーバに記録されます。これでスケジュール設定は完了です。



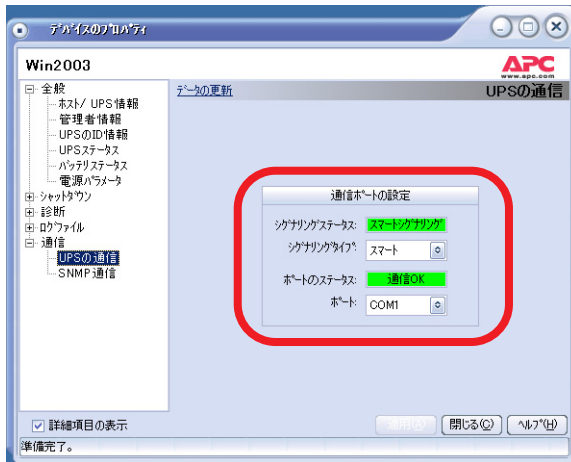
注意：PowerChute Business Edition コンソールにて何らかの値の変更を行った場合、「適用」ボタンが有効になります。この状態で「キャンセル」等で終了しようとする、以下のようなウィンドウが表示されます。

この場合、「はい」を選択すると変更内容が対象サーバへ適用されませんのでご注意ください。



12 UPS との通信設定について

PowerChute Business Edition コンソール、または WebUI を使用することでシグナリングタイプの変更、および COM ポートの変更ができます。



PowerChute Business Edition コンソールから変更を行う場合は、デバイスのプロパティを表示後、「詳細項目の表示」のチェックボックスをオンにし、[通信]-[UPS の通信] を選択することで表示される上記画面にて変更を行います。

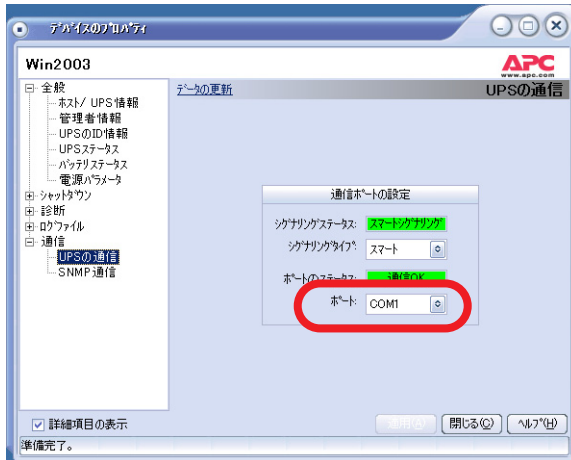


WebUI の場合は [保護されたシステム]-[システムの設定] にて表示される上記画面より変更を行います。

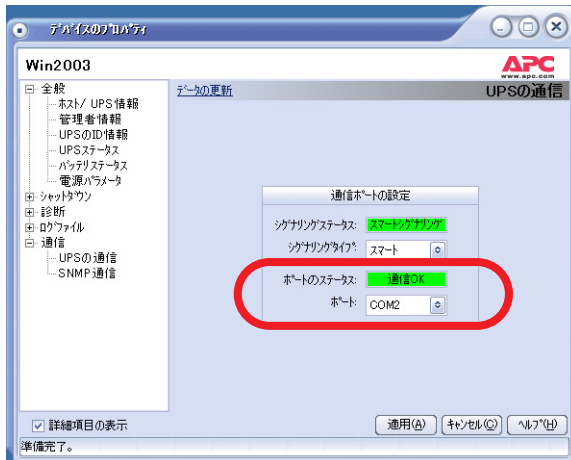
12.1 通信ポートの変更

PowerChute Business Edition コンソールからのシリアルポートの変更手順を説明します。

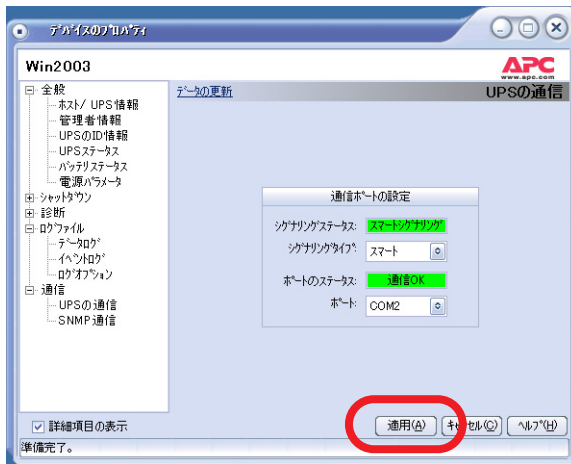
1. 対象サーバのデバイスのプロパティを表示させ、[通信]-[UPSの通信]を表示させてください。現在設定されているシリアルポートが表示されます。



2. ポートのドロップダウンメニューより、変更するシリアルポートを選択してください。



3. 「適用」 ボタンを押す前に、対象サーバサーバに接続されているシリアルケーブルを変更した通信ポートにつなぎかえてください。つなぎかえましたら、「適用」 ボタンを押してください。（つなぎかえることで、「通信切断」のイベントが検出されます。）



4. 正しく変更されたかを確認するために、以下を行ってください。

なお、対象サーバが使用しているシグナリングタイプにより、確認方法が異なりますのでご注意ください。

< スマートシグナリングで使用している場合 >

「適用」 ボタン押下後、しばらく待ち、デバイスのプロパティウィンドウの [ログファイル]-[イベントログ] を参照してください。

最新のログに「通信確立」が出力されている場合は、UPS との通信が確立しています。

最新のログが「通信切断」のままの場合は、UPS との通信が確立していません。シリアルケーブルが PowerChute Business Edition にて設定されている「通信ポート」に正しく接続されているか、および「UPS 装置」と正しく接続されているかを確認してください。サーバ装置の仕様により使用可能なシリアルポートが限られていることもありますので、サーバ装置に添付のマニュアル等で確認してください。

< シンプルシグナリングで使用している場合 >

シンプルシグナリングは使用できません。

13 コンソールと WebUI における機能差分

機能		Console	WEB	備考
操作	「管理者情報」の設定	○	△	WebUI ではメモの登録が不可
	「UPS の ID 情報」の設定	○	△	WebUI ではデバイス 1~4 の設定が不可
	「バッテリー交換日」の設定	○	△	WebUI では月まで登録が可能（日は不可）
	「バッテリー切替値（上限）」の設定	○	○	
	「バッテリー切替値（下限）」の設定	○	○	
	「感度」の設定	○	○	
	「警告音」の設定	○	○	
	「コマンドファイル」の設定	○	○	
	「コマンドファイル待機時間」の設定	○	×	コマンドファイル実行を開始するまでの待機時間
	「コマンドファイル期間」の設定	○	○	コマンドファイルの実行に要する時間
	「OS シャットダウン待機時間」の設定	○	×	OS シャットダウンを開始するまでの待機時間
	「OS シャットダウン期間」の設定	○	○	OS のシャットダウンが開始されてから UPS が OFF になるまでの時間の設定
	「シャットダウンタイプ」の設定	○	○	Windows サーバのみ設定可、Linux は不可
	「ローバッテリー信号時間」の設定	×	○	
	「ローランタイムしきい値」の設定	△	○	Console では「OS シャットダウン待機時間」+「OS シャットダウン期間」に自動で設定される。WebUI では値を直接設定可能。
	「スケジュールシャットダウン」の設定	○	×	
	「電源障害時のシャットダウン開始までの待機時間」の設定	○	○	WebUI では【イベント】→【アクション】の「バッテリー状態しきい値超過」イベントで設定可能
	「電源回復時の UPS 再起動の有無」の設定	○	○	
	「UPS 再起動待機（容量）」の設定	○	○	
	「UPS 再起動待機（時間）」の設定	×	○	
	「セルフテスト」の実行	○	○	
	「セルフテスト診断スケジュール」の設定	×	○	設定可能なパラメータは「起動時」、「7 日ごと」、「14 日ごと」、「しない」
	「UPS ランタイム校正」の実行	○	○	
	「UPS ランタイム校正」の停止	○	○	
	「データログ」のクリア	○	○	
	「データログの採取の有無」の設定	○	○	
	「データログ記録間隔」の設定	○	○	
	「データログ表示項目」の設定	×	○	
	「イベントログ」のクリア	○	○	
	「イベントログの採取の有無」の設定	○	○	WebUI ではイベントごとに設定が可能
「イベントログサイズ」の変更	○	○	Console ではイベントの数、WEB では有効期間を設定	
「イベントアクション」の設定	×	○		

機能		Console	WEB	備考
操作	「Agent からのイベントの E-Mail 通知」の設定	×	○	
	「Server からのイベントの E-Mail 通知」の設定	○	×	
	「イベントのブロードキャスト通知先」の設定 (Agent)	×	○	
	「イベントのブロードキャスト通知先」の設定 (Server)	○	×	
	「シグナリングタイプ」の変更	○	○	
	「UPS 通信ポート」の変更	○	○	
	「SNMP 通信の有効/無効」の設定	○	×	Windows からのみ可能、Linux では使用不可
	「手動でのサーバのシャットダウン」の実行	○	○	
	同「シャットダウン開始までの時間」の設定	○	○	
	「手動でのサーバのシャットダウン (再起動あり)」の実行	○	○	
	同「再起動までの待機時間」の設定	○	○	
	「サーバの IP アドレス」の表示	○	○	
	「エージェントのバージョン」の表示	○	○	
	「サーバの OS」の表示	○	○	
	「UPS モデル」の表示	○	○	
	「UPS のシリアル番号」の表示	○	○	
	「UPS の製造日」の表示	○	○	
	「ファームウェアのリビジョン」の表示	○	○	
	「バッテリー交換日表示」の表示	○	○	
	「UPS ステータス」の表示	○	○	
	「UPS 内部温度」の表示	○	○	
	「UPS 出力電圧」の表示	○	○	
	「UPS 入力電圧」の表示	○	○	
	「UPS 出力周波数」の表示	○	○	
	「UPS 負荷」の表示	○	○	
	「バッテリーのステータス」の表示	○	○	
	「バッテリー電圧」の表示	○	○	
	「ランタイム残量」の表示	○	○	
	「バッテリー容量」の表示	○	○	
	「シグナリングタイプ」の表示	○	○	
	「ポートのステータス」の表示	○	×	
	「イベントログ」の表示	○	○	
「データログ」の表示	○	○		
「電源イベント」のグラフ表示	○	×		
「入力電圧」のグラフ表示	○	×		
「リスクアセスメント」の表示	○	×		

14 障害発生時の資料採取方法

ここでは障害が発生した場合の資料採取方法を説明します。以下に記載されている Windows 環境および Linux 環境での障害資料を採取し、82 ページの「14.3 障害調査依頼票」に記載されている情報を調べてください。

14.1 Windows 環境

以下に採取が必要な障害資料を記載します。

PowerChute Business Edition のログ

PowerChute Business Edition エージェント

1. エクスプローラ等で PowerChute Business Edition エージェントがインストールされているフォルダを開く。(デフォルト :Program Files\APC\PowerChute Business Edition\agent)
2. その中にある下記ファイルおよびフォルダを FD 等の媒体に保存する。

[エージェントインストールフォルダ直下]

- DataLog
- EventLog
- m11.cfg (m11 の 1 は数字の 1 です。ご注意ください。)
- m11.bak (m11 の 1 は数字の 1 です。ご注意ください。)
- debug.txt
- data.dat
- pcbeproxy.txt

[エージェントインストールフォルダ下の「cmdfiles」フォルダ]

- 「cmdfiles」フォルダおよびその配下のすべてのファイルを保存する。

[エージェントインストールフォルダ下の「utils」フォルダ]

- pcbeproxy.ini
- UPSSleep.log (UPSSleep.exe を実行した場合、デフォルトではここに作成されます)
- EventLog.txt (存在する場合のみ採取してください)
- Export.log (存在する場合のみ採取してください)

PowerChute Business Edition サーバ

1. エクスプローラ等で PowerChute Business Edition サーバがインストールされているフォルダを開く。(デフォルト :Program Files\APC\PowerChute Business Edition\server)
2. その中にある下記ファイルを FD 等の媒体に保存する。
 - m11.cfg (m11 の 1 は数字の 1 です。ご注意ください。)
 - m11.bak (m11 の 1 は数字の 1 です。ご注意ください。)

- data.dat
- debug.txt

PowerChute Business Edition コンソール

1. エクスプローラ等で PowerChute Business Edition コンソール がインストールされているフォルダを開く。
(デフォルト :¥Program Files¥APC¥PowerChute Business Edition¥console)
2. その中にある下記ファイルを FD 等の媒体に保存する。
 - console.ini

OS のイベントログの採取

イベントログは、システムログとアプリケーションログの両方を採取してください。

※イベントログのサイズは設定によって異なりますが、各 FD1 枚ぐらいが目安です。

1. [スタート]→[設定]→[コントロールパネル]→[管理ツール]のイベントビューアを起動します。
2. ツリーでアプリケーションログを表示させ、【操作】を指定し、【ログファイルの名前を付けて保存】を選択します。
3. ファイル名をつけて保存ダイアログが表示されたら、ファイル名エディットボックスにログセーブファイル名を入力して「保存」ボタンを選択してください。ログがセーブされます。
4. セーブしたファイルを FD 等の媒体に採取してください。
5. 同様にして、システム(ツリーでシステムログを指定)のイベントログも採取してください。

システム情報ファイル

システム情報ファイルを FD 等の媒体に保存してください。

システム情報ファイルのサイズは環境によって異なりますが、FD1 枚ぐらいが目安です。

Windows Server 2003/Windows XP の場合

<Windows Server 2003 の場合 >

1. スタートメニューから [ファイル名を指定して実行] を起動し、『名前』の入力欄に「msinfo32.exe」と入力してください。「システム情報」が起動します。

<Windows XP の場合 >

1. スタートメニューから [すべてのプログラム]→[アクセサリ]→[システムツール]の「システム情報」を起動します。
2. メニューから [ファイル]→[上書き保存]を選択します。
3. 名前をつけて保存ダイアログが表示されたら、ファイル名を入力して「保存」ボタンをクリックしてください。システム情報ファイルがセーブされます。
4. セーブしたファイルを FD 等の媒体に採取してください。

Windows 2000 の場合

1. スタートメニューから [設定] → [コントロールパネル] を起動し、その中の「管理ツール」 → 「コンピュータの管理」 を起動します。
2. ツリーでシステム情報を選択します。
3. メニューから [操作] → [システム情報ファイルとして保存] を選択します。
4. 名前をつけて保存ダイアログが表示されたら、ファイル名を入力して「保存」ボタンを選択してください。システム情報ファイルがセーブされます。
5. セーブしたファイルを FD 等の媒体に採取してください。

Collect ログと IPMI ログ

ESMPRO/ServerAgent がインストールされている場合は、Collect ログおよび IPMI ログを採取してください。採取方法を以下に示します。

採取作業はローカルサーバ上で行ってください。

Collect ログの採取

Collect ログは、ESMPRO/ServerAgent の「collect.exe」で採取します。collect.exe は ESMPRO/ServerAgent インストールフォルダ (デフォルトは ¥ESM) の ¥tool フォルダ配下にあります。

collect.exe により採取される情報は、ESMPRO/ServerAgent インストールフォルダ下の「¥tool ¥log」フォルダに保存されますので、そのフォルダ内のファイルおよびフォルダを送付してください。

IPMI ログの採取

IPMI ログは、ESMPRO/ServerAgent もしくは ESMPRO/ServerManager の「ESRAS ユーティリティ」で採取します。

ESRAS ユーティリティを起動し、ツリー内のローカルサーバをクリックしてください。すると「ローカルコンピュータの情報を取得しますか？」と表示されますので、「OK」をクリックしてください。サーバの情報取得処理が終了した後に、ツリーの「Intelligent Platform Management Interface(IPMI) 情報」にマウスカーソルをあわせ、右クリックで表示されるメニューから「現在の IPMI 情報をバックアップする」を選択し、IPMI 情報をバックアップしてください。

※このとき、指定するファイル名は「ipmi.dat」にしてください。

確認事項

(1) BIOS の設定

サーバ装置における BIOS の設定により、UPS からの電力供給が開始されても、サーバが起動しない場合があります。BIOS の設定を確認してください。

== UPS を使って自動運転を行う場合の注意 ==

UPS を使って自動運転を行う場合は、サーバ装置の BIOS の設定で、AC-LINK(AC 連動モード)を「Power ON」にしていいただく必要があります。BIOS の設定方法

については、サーバにより異なります。サーバ本体添付のマニュアルを参照してください。

注意：AC-LINK は、サーバ機種により「After Power Failure」と記載されている場合があります。

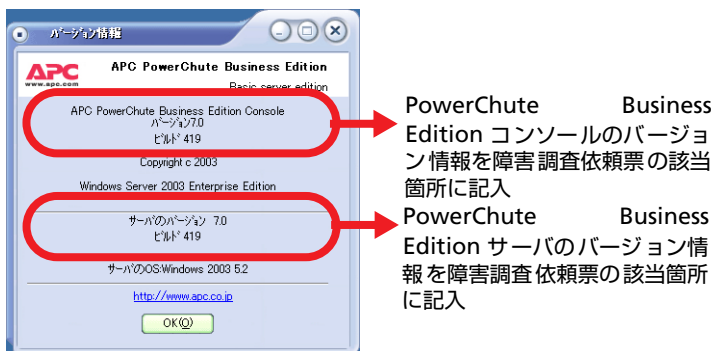
(2) WebUI を使用するための準備

採取していただく資料の中には WebUI のみでしか確認できない情報があります。41 ページの「9 WebUI での操作」を参照して、WebUI を使用する準備ができていることを確認してください。

(3) PowerChute Business Edition 各コンポーネントのバージョン情報の確認

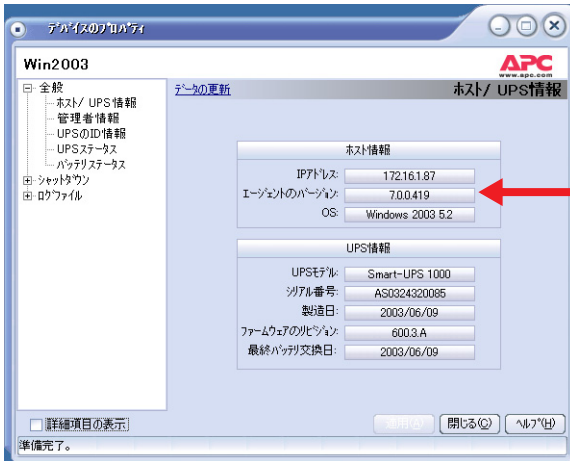
PowerChute Business Edition コンソールを使用して情報の確認をします。

PowerChute Business Edition コンソールを起動し、メインメニューの「ヘルプ」→「バージョン情報」を起動してください。以下の赤丸で囲まれている情報を「障害調査依頼票」の該当箇所にそれぞれ記録してください。



次に、障害が発生したサーバのエージェントの情報を確認します。PowerChute Business Edition コンソールで対象サーバを選択し、右クリックして「プロパティ」を選択して「デバイスのプロパティ」ウィンドウを表示させてください。「全般」→

「ホスト/UPS 情報」を選択して、以下の矢印で示された情報を「障害調査依頼票」に記録してください。



PowerChute Business Edition エージェントのバージョン情報を障害調査依頼票の該当箇所に記入

< 参考 > : WebUI から PowerChute Business Edition エージェントのバージョン情報を確認することはできますが、PowerChute Business Edition サーバおよび PowerChute Business Edition コンソールのバージョン情報は確認できませんのでご注意ください。

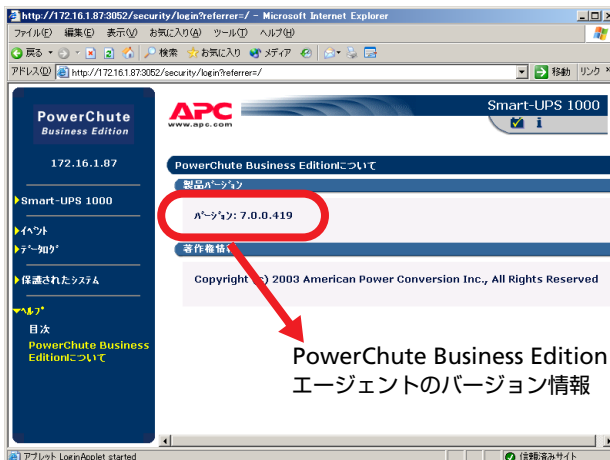
【PowerChute Business Edition エージェントのバージョン情報を WebUI にて確認する方法】

WebUI を使用して PowerChute Business Edition エージェントがインストールされているサーバに接続し、PowerChute Business Edition エージェントのバージョン情報を確認します。

(「ヘルプ」 → 「PowerChute Business Edition について」を選択します。)

接続方法 : ブラウザを起動し下記 URL を入力してください。

http:// エージェントがインストールされているサーバの IP アドレス :3052



PowerChute Business Edition エージェントのバージョン情報

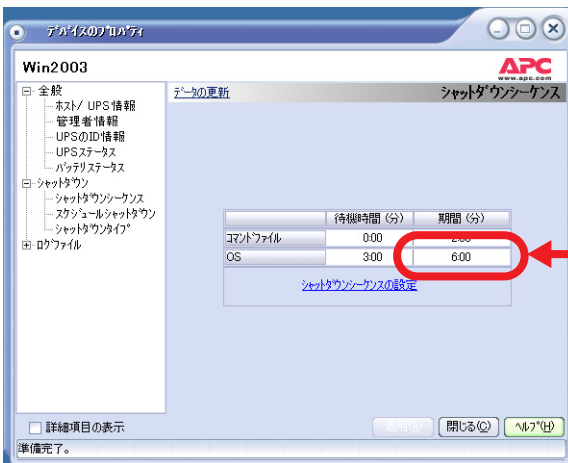
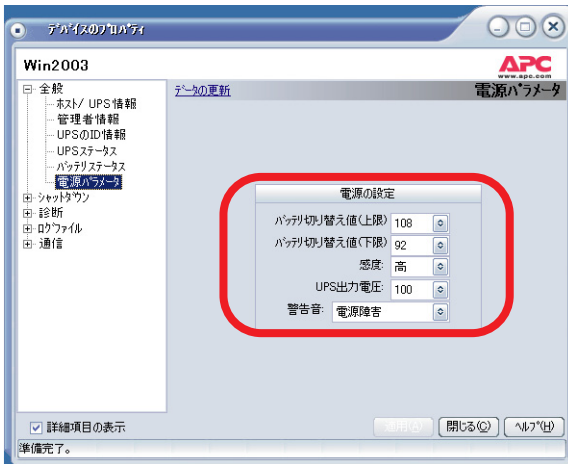
(4) UPS の設定値の確認

UPS の設定値 (「バッテリー切り替え値 (上限)」、「バッテリー切り替え値 (下限)」、「感度」、「OS シャットダウン期間」、「電源回復時の UPS 再起動」) を確認します。

これらの情報は **Smart-UPS** 側の **RAM** に保持される情報のため、**PowerChute Business Edition** ログに記録されません。下記手順により各設定値を確認し、「14.3 障害調査依頼票」に記載してください。

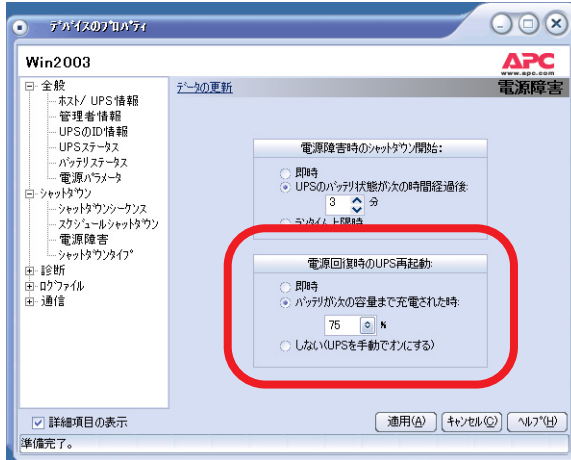
- PowerChute Business Edition コンソールでの確認

1. PowerChute Business Edition コンソールを起動し「デバイスのプロパティ」画面で各パラメータを調べてください。(ツリーの「全般」→「電源パラメータ」および「シャットダウン」→「シャットダウンシーケンス」を選択します。「電源パラメータ」を表示するには「詳細項目の表示」にチェックを入れてください。)



2. 次に、ツリーの「シャットダウン」→「電源障害」を選択します。

以下に示されている、「電源回復時のUPS再起動」の設定内容を障害調査票に記入してください



“即時” または “バッテリー充電が次の容量になった時” が選択されている状態ならば、障害調査票内の「OSの再起動を有効にする」の欄に「はい」と記入してください。

“しない(UPSを手動でオンにする)” が選択されている状態ならば、「OSの再起動を有効にする」の欄に「いいえ」と記入してください。

● WebUI での確認

WebUI で PowerChute Business Edition エージェントがインストールされているサーバに接続してかくパラメータを確認し、「障害調査依頼票」に記録してください。(「UPS 種類」→「設定」および「保護されたシステム」→「シャットダウンの設定」を選択します。)

接続方法：ブラウザを起動し下記 URL を入力してください。

http:// エージェントがインストールされているサーバの IP アドレス :3052



以下の画面で各パラメータを確認してください。



(5) 「障害調査依頼票」に記載されているその他の情報を収集し、記入してください。

14.2 Linux 環境

コマンドラインからログ採取を行う場合は、「コマンドラインから行う場合」を作業後「確認事項」へ進んでください。

コマンドラインから行う場合

以下で行う資料採取の作業はすべて root 権限にて行ってください。一般ユーザにてログインしている場合は、「su -」コマンドにて root 権限になり行ってください。

PowerChute Business Edition のログ

- PowerChute Business Edition エージェント

1. フォーマット済みの FD を Linux サーバの FD ドライブに挿入する。

以下のコマンドで FD をマウントする。

- Windows でフォーマットした FD を使用する場合
例) `mount -t vfat /dev/fd0 /mnt/floppy`
- Linux でフォーマットした FD を使用する場合
`mount /dev/fd0 /mnt/floppy`

2. PowerChute Business Edition エージェント のインストールされているディレクトリへ移動します。

例) `cd /opt/APC/PowerChuteBusinessEdition/Agent`

3. ディレクトリ配下の下記ファイルおよび、ディレクトリを FD 媒体等に保存してください。

- DataLog
- EventLog
- m11.cfg (m11 の 1 は数字の 1 です。ご注意ください)
- m11.bak (m11 の 1 は数字の 1 です。ご注意ください。)
- data.dat
- debug.txt
- pcbeproxy.txt
- 「cmdfiles」ディレクトリおよびそのディレクトリ配下のファイル
例) `cp -r cmdfiles /mnt/floppy` コマンドで「cmdfiles」ディレクトリ配下を一括コピーできます。

※ファイルサイズが大きい場合、tar コマンドなどで圧縮し、FD 媒体に保存してください。

例) `tar cvzf ./pcbe_agent.tar.gz DataLog EventLog m11.cfg
m11.bak debug.txt
data.dat pcbeproxy.txt cmdfiles`

4. 以下のコマンドで FD をアンマウントする。

例) `umount /dev/fd0`

注意：アンマウントせずに **FD** 媒体を取り出すと、正しく **FD** に保存されない場合がありますので、**FD** を取り出す前に必ずアンマウントしてください。

シスログの採取

以下の手順により、シスログの採取を行ってください。

1. フォーマット済みの **FD** を Linux サーバの **FD** ドライブに挿入する。
2. 以下のコマンドで **FD** をマウントする。
 - Windows でフォーマットした **FD** を使用する場合
例)mount -t vfat /dev/fd0 /mnt/floppy
 - Linux でフォーマットした **FD** を使用する場合
例)mount /dev/fd0 /mnt/floppy
3. /var/log フォルダへ移動します。
cd /var/log
4. その中にある「messages」ファイルを以下のコマンドで **FD** 媒体に保存する。
ご使用の環境によっては messages、messages.1、messages.2、…と複数の message ファイルが存在します。下記コマンドによりそれらを一括でコピーできます。
例)cp messages* /mnt/floppy
※ファイルサイズが大きい場合は、tar コマンド等で圧縮し、**FD** 媒体に保存してください。
例)tar cvzf ./logfile1.tar.gz messages*
5. 以下のコマンドで **FD** をアンマウントする。
例)umount /dev/fd0

注意：アンマウントせずに **FD** 媒体を取り出すと、正しく **FD** に保存されない場合がありますので、**FD** を取り出す前に必ずアンマウントしてください。

確認事項

確認事項および確認方法は Windows 版と同じです。81 ページの「確認事項」を参照して情報の採取を行ってください。

14.3 障害調査依頼票

「確認事項」にて確認した内容を、下記の該当個所に記入してください。

《環境情報》

◆ソフトウェア情報◆

● 製品

- PowerChute Business Edition バージョン ()
- PowerChute Business Edition
エージェント バージョン ()
- PowerChute Business Edition
サーバ バージョン ()
- PowerChute Business Edition
コンソール バージョン ()

● その他の製品

● ネットワークプロトコル ※全て記入してください

(例) TCP/IP、NetBIOS プロトコル (LANManager)

● PowerChute Business Edition の設定値

- バッテリ切り替え値 (上限) () VAC
- バッテリ切り替え値 (下限) () VAC
- 感度 ()
- ローバッテリー信号時間 () 分
- OS シャットダウン期間 () 秒
- UPS 再起動待機 (時間) () 秒
- UPS 再起動待機 (容量) () %
- 電源回復時の UPS 再起動 ()

注意：「OS シャットダウン期間」は WebUI では「OS シャットダウン待機時間」と表現されています。

◆ハードウェア情報◆

● UPS

Smart-UPS () 型番 (N)

● サーバ本体機種 ※ OS(SP 含む) も含めて全て記入してください

15 注意事項

- サーバの機種によっては電源制御モードを「AC 連動モード」に設定する必要があります。設定方法はサーバの機種によって異なるため、サーバ本体の取り扱い説明書を参照するか、保守員にご相談ください。
- [OS のシャットダウン期間] (WebUI では「OS シャットダウン待機時間」) の設定値は、OS のシャットダウンが開始されてから UPS の電源がオフになる時間です。設定前にサーバのシャットダウンに必要な時間を計測し、その時間を十分に超える値を設定してください。
- PowerChute Business Edition で設定するユーザ名とパスワードは、コンソール、サーバ、および管理対象エージェントで共通でなければなりません。異なるユーザ名、パスワードを設定したエージェントがある場合、そのエージェントを管理するためには、各エージェントと同一のユーザ名、パスワードを設定した「PowerChute Business Edition サーバ」コンポーネントのサーバがそれぞれ必要となります。

また、ユーザ名、パスワードを間違えて入力すると PowerChute Business Edition は正常に動作しません。特に、パスワードは「*」で表示されており、確認することができないので十分に注意して入力を行ってください。ただし、コンピュータ、または管理者アカウントやドメインアカウントと異なっていても構いません。

- PowerChute Business Edition エージェント、サーバのユーザ ID、パスワードとして使用できる記号文字は (% = - ~ ^ @ { [+] , . / _) の 15 文字です (両端のカッコは除く)。その他の記号文字を使用すると PowerChute Business Edition エージェント、サーバにアクセスできません。
- PowerChute Business Edition エージェントがインストールされていない環境でサーバの再起動を行う時は、サーバ装置からシリアルケーブルを抜いておいてください。PowerChute Business Edition エージェントがインストールされていないサーバにシリアルケーブルを接続したままサーバの再起動をすると、OS からシリアルポートに送信される文字列を UPS がバッテリー動作に切り替える命令と解釈して、UPS のランタイム較正が実行される場合があります。このような不要なバッテリー動作への切り替えによってバッテリー残量が減少し、インストールが失敗するのを防止するために、必ずシリアルケーブルをサーバから抜いておいてください。
- 1 つのエージェントを複数のコンソールから同時にアクセスしないように注意してください。また、WebUI を使用する場合も同様に同時に複数のマシンからアクセスしないようにしてください。これは、同時に設定が行われた場合に設定の不整合が生じるのを防止するためです。
- 本製品をインストールする本体装置によっては、管理用としてシリアルポートが確保されている場合や、サーバ装置の仕様により使用可能なシリアルポートが限定されている場合があります。管理用として確保されていない、使用可能なシリアルポートを使用して UPS とサーバ本体を接続してください。

使用可能なシリアルポートを確認する場合はサーバ装置添付のマニュアルを参照してください。

- PowerChute Business Edition コンポーネントのインストールは、OS にサービスパックを適用後に実施してください。すでに PowerChute Business Edition がインストールされたサーバに対して OS のサービスパックを適用する場合は、サービスパックを適用する前に PowerChute Business Edition をアンインストールする必要があります。なお、アンインストールをする前に PowerChute Business Edition にて行った設定情報 (UPS の設定値、スケジュール情報等) を予めメモしておいてください。サービスパック適用後に PowerChute Business Edition をインストールし、メモした内容を基に再設定を行ってください。
- エージェントのインストール時、セットアッププログラムが UPS を自動検出できない場合、以下のとおり対処してください。

[APC UPS の通信ポートを自動検出しますか ?] の画面で、自動検出を行わずに「いいえ」を選択してください。

「はい」を押すと検出に失敗しインストールが終了します。必ず「いいえ」を選択してください。UPS タイプと通信ポートを選択してください。

UPS タイプは「Smart-UPS」を選択してください。

システムがスマートシグナリングで UPS を使用している場合に、UPS デバイスが手動設定できない場合は次の原因が考えられます。

- ターミナルエミュレータなどの他のサービスが、UPS が接続されている通信ポートを使用している。該当する通信ポートを使用しているサービスを終了するか、または UPS を他の通信ポートに接続し直してから、再び、手動で UPS タイプと通信ポートの設定を行ってください。
- UPS が製品添付のスマートシグナリングシリアルケーブルを使って接続されていない。
- UPS が接続されている通信ポートの通信設定が誤っている。
- UPS とコンピュータ間の接続に問題がある。(後述の、ハイパーターミナルによる確認手順にて確認を行ってください。)

- PowerChute Business Edition と PowerChute plus を同一コンピュータ上で使用することはできません。PowerChute plus がインストールされているサーバに PowerChute Business Edition コンポーネントのインストールを行うと、インストールされている PowerChute plus のバージョンに応じて次のいずれかのメッセージが表示されます。

メッセージ	説明
セットアッププログラムは、PowerChute plus を検出しました。このソフトウェアは、PowerChute Business Edition のセットアッププログラムを実行する前に削除しておく必要があります。PowerChute plus を削除しますか？([いいえ]を選択すると、セットアッププログラムが終了します。)	[はい]を選択すると、既存の PowerChute plus 5.x がアンインストールされます。[いいえ]を選択した場合は、インストールが中止されます。
セットアッププログラムは、PowerChute plus を検出しました。この製品をアンインストールしてからもう一度セットアッププログラムを実行してください。	セットアッププログラムは、既存の PowerChute plus 4.x をアンインストールすることはできません。PowerChute Business Edition コンポーネントをインストールする前に、PowerChute plus をアンインストールする必要があります。

- PowerChute Business Edition のインストール時に表示されるメッセージを次に示します。

メッセージ	説明
UPS サービスを停止できません。再起動してからもう一度セットアップし直してください。	セットアッププログラムは Windows 2000/XP/2003 標準 UPS サービスを停止できませんでした。コンピュータを再起動してから、PowerChute Business Edition エージェントを再インストールしてください。
<エージェント/サーバ> サービスのインストール時にエラーが発生しました。再起動してからもう一度セットアップし直してください。	PowerChute Business Edition サービスのインストールに失敗しました。まだ PowerChute Business Edition のファイルがインストールされていないこと、およびコンピュータの OS が適切なものかどうかを確認した後(エラー! 参照元が見つかりません。エラー! 参照元が見つかりません。を参照)、もう一度インストール作業を行ってください。

メッセージ	説明
次の dll のロード時にエラー <ID> が発生しました :<dll の ID>	セットアッププログラムが DLL ファイルのロードに失敗しました。コンピュータの OS が適切なものかどうかを確認し (エラー! 参照元が見つかりません。エラー! 参照元が見つかりません。を参照)、記載されている条件を満たしていることを確認の上、もう一度インストール作業を行ってください。
必要なリソースのロードに失敗しました。	PowerChute Business Edition コンポーネントのインストールに必要なリソース (DLL リソース、InstallShield リソースなど) をロードできませんでした。コンピュータに十分なメモリがあることを確認してから (エラー! 参照元が見つかりません。エラー! 参照元が見つかりません。を参照)、もう一度インストール作業を行ってください。
パスワードが 3~16 文字ではありません。	3~16 文字のパスワードを使用して下さい。
PowerChute Business Edition をインストール、実行するには管理者権限が必要です。いったんログオフしてから、管理者権限を持つアカウントを使ってセットアッププログラムを再実行してください。	PowerChute Business Edition コンポーネントをインストールするには、コンピュータに対する管理者権限が必要です。
選択されたパスが有効かどうか判断できません。ローカルハードドライブ上のディレクトリを選択してください。	PowerChute Business Edition をネットワークドライブ、フロッピーディスクドライブ、zip ドライブなどの、ローカルハードディスク以外のドライブにインストールすることはできません。
標準 UPS サービスの再起動に失敗しました。電源保護を有効にするには、手動でサービスを再開するか、システムを再起動する必要があります。	PowerChute Business Edition エージェントをインストールするために停止させた OS 標準の UPS サービスを再開することができません。コンピュータを再起動するか、または手作業でサービスを再開してください。
両方のパスワードが一致していません。	[パスワード] と [確認] に入力した内容が一致しないと PowerChute Business Edition コンポーネントをインストールすることはできません。
ユーザ名が 3~16 文字ではありません。	3~16 文字のユーザ名を使用してください。

- PowerChute Business Edition の状態が「通信なし」、「通信切断」の場合は、UPS との通信が正常に行われていません。これらの問題を解決するには、手順 1 から順番に確認作業を行ってください。各手順に従って作業を行い、設定内容が異なる場合には変更し、終了時に UPS との通信を確認してください。

- 手順 1: シリアルポート設定の確認
- 手順 2: シリアル接続が正常かどうかの確認

手順 1: シリアルポート設定の確認

UPS が接続されているシリアルポートの設定をチェックするために次の操作を行います。

[コントロールパネル]の[システム]アイコンをダブルクリックして、[ハードウェア]タブを選択します。次に[デバイスマネージャ]をクリックして、[通信ポート]を選択します。

ここの設定が次のようになっていることを確認してください。

パラメータ	設定
ボーレート	2400
データビット	8
パリティ	なし
ストップビット	1
フロー制御	Xon/Xoff
FIFO バッファを使用する	(無効にします)

注意：詳細設定の割り込み番号 (IRQ) が他のデバイスの IRQ と衝突していないことも確認してください。

手順 2: シリアル接続が正常かどうかの確認

ハイパーターミナル (HyperTerminal) を使用してシリアル接続が正常かどうかを確認します。

- a. PowerChute Business Edition を終了し、「APC PBE Agent」サービスを停止します。
- b. [スタート]→[プログラム]→[アクセサリ]→[通信]→[ハイパーターミナル]を選択し、[ハイパーターミナル]を起動します。

注意：Windows Server 2003 においては、「ハイパーターミナル」がインストールされていない場合があります。その場合、[プログラムの追加と削除]→[Windows コンポーネントの追加と削除]から「ハイパーターミナル」をインストールしてシリアル接続の確認を行ってください。

- c. [接続の設定]ダイアログボックスに[名前を入力し、アイコンを選んでください]と表示されたら、適当な名前(例:PCBE TEST)を入力し、[OK]をクリックします。

[接続する前に、まずモデムをインストールしなければなりません。インストールを始めますか?] というメッセージが表示された場合は [いいえ] を選択して作業を続行します。

- d. [接続方法] から、現在 UPS へ接続しているコンピュータシリアルポート番号 (例 : COM1) を選択後

< Windows Server 2003 の場合 >

[構成] を選択し、項番 e の設定を行った後、項番 f に進みます。

< Windows 2000/XP の場合 >

[OK] をクリックし、項番 e に進みます。

- e. [ポートの設定] タブから、以下の値を設定します。

パラメータ	設定
ビット / 秒	2400
データビット	8
パリティ	なし
ストップビット	1
フロー制御	Xon/Xoff
FIFO バッファを使用する	選択を解除する

- f. 何も表示されていないブランクスクリーンで大文字の Y を入力すると、画面に「SM」の文字が表示されます。

- g. 大文字の A を入力すると UPS からピーブ音となり、フロントパネルの LED が点滅し、画面に「OK」の文字が表示されます。

画面に「SM」と表示されない場合に、大文字の A を入力すると UPS のピーブ音が鳴り LED が点滅する場合、UPS 側で信号を受信しているのに送信できない可能性があります。次のような理由が考えられます。

- UPS からコンピュータへの信号送信機能が壊れている。
- インタフェースケーブル不良。
- コンピュータのシリアルポートが信号を受信できない。割り込みの衝突や、シリアルポート異常などの原因が考えられます。

画面に「SM」と表示されない場合には、他のシリアルケーブル、他のシリアルポート、他のコンピュータ、または他の UPS を使用してハイパーターミナルから同じ操作を行い、問題点の切り分け、究明を行ってください。

- Windows Server 2003 サーバに PowerChute Business Edition エージェントコンポーネントをインストールし、UPS 装置を使用してサーバ装置の電源制御を行う場合、サーバ装置の BIOS 設定において、AC-LINK (AC 連動モード) 設定に「Power ON」が設定可能か確認してください。確認方法はサーバ添付のユーザーズガイドを参照してください。「Power ON」相当の設定の可否により、提供できる機能が異なります

注意：AC-LINK は、サーバ機種により「After Power Failure」と記載されている場合があります。

設定不可	停電による安全なシャットダウンはできませんが、復電後のサーバ自動起動はできません。 また、スケジュールによるサーバの自動シャットダウンはできますが、スケジュールによるサーバの自動起動はできません。
設定可能	停電シャットダウン後の復電によるサーバの自動起動、およびスケジュールによるサーバの自動シャットダウン/自動起動運転ができます。 停電シャットダウン後の復電によるサーバの自動起動、あるいはスケジュールによるサーバの自動起動を行われる場合は、「Power ON」に設定してください。 注意：サーバによっては工場出荷時に「Last State」と設定されている場合がありますので、運用前にサーバ装置の BIOS 設定を確認することを強くお勧めします。

- Windows Server 2003 サーバ上で以下に挙げる操作を行う場合、Internet Explorer(以下 IE と省略)のセキュリティ設定を変更する必要があります。
 - PowerChute Business Edition コンソールを使用する
 - IE を使用して PowerChute Business Edition エージェントにアクセスする

< 設定変更 >

IE のメニューにおいて

[ツール] → [インターネットオプション]

を選択し、「セキュリティ」タブを選択後、以下のいずれかの設定を行ってください。

- (設定変更 1)
「インターネット」を選択し、「このゾーンのセキュリティレベル」を『中』に変更。
- (設定変更 2)
「信頼済みサイト」を選択し、『サイト』ボタンを選択後、対象のサーバへアクセスするための URL を入力し、『追加』ボタンにより登録してください。

http://(対象サーバの IP アドレス)

< 例 >

アクセスするサーバの IP アドレスが 192.168.0.3 の場合、「信頼済みサイト」には以下のように登録します。

http://192.168.0.3

- Windows サーバから送信されるポップアップメッセージを受信し表示させたい場合、受信するマシン側において「Messenger」サービスが動作している必要があります。

注意：**Windows Server 2003** の場合、**OS** インストール後のデフォルト設定では「**Messenger**」サービスが動作しない設定になっている場合があります。

- Windows Server 2003 サーバにターミナルサーバーサービスがインストールされている状態で、PowerChute Business Edition の " サーバ " コンポーネントおよび、" コンソール " コンポーネントをアンインストールした場合、Windows の [スタート] メニューに登録される [APC PowerChute Business Edition] 配下のメニューが削除されないことがあります。

削除されなかったメニューはアンインストール後、手動で削除してください。なお、PowerChute Business Edition の " サーバ " および " コンソール " をアンインストール後、以前と異なるパスにインストールした場合、[スタート] メニューに残った [APC PowerChute Business Edition] 配下のメニューに関するリンク情報は、新たにインストールされたパスの情報に更新されます。

- PowerChute Business Edition エージェントをインストールした後、PowerChute Business Edition サーバ、およびコンソールから「設定プロファイルの適用」を行わずに停電させた場合、UPS のバッテリー容量がなくなるまで、サーバのシャットダウンは行われません。

「設定プロファイルの適用」を行わずに、停電発生時の動作を設定するためには WebUI を使用します。WebUI による設定は、テストするサーバ毎に行っていただく必要があります。

なお、PowerChute Business Edition サーバ、およびコンソールから「設定プロファイルの適用」を行うと、停電発生時の動作を設定プロファイルの作成で選択した電源保護方針に沿った内容で一括して設定できるため、「設定プロファイルの適用」を行うことを推奨します。

設定プロファイルおよび電源保護方針については、インストールガイド 14 ページの「5.2 PowerChute Business Edition サーバのインストール」およびリリースノート「2.5 設定プロファイル」を参照してください。

- PowerChute Business Edition エージェントがインストールされた各サーバにて個別の設定を行った後に「設定プロファイルの適用」あるいは「設定プロファイルの再適用」を行うと、各エージェントにて行った設定内容が設定プロファイルの内容に初期化されてしまいます。設定プロファイルの適用を行う前に各エージェントにて設定した個別の設定内容 (OS シャットダウンまでの時間、コマンドファイル実行所要時間、WebUI にて設定するイベントアクション等) をあらかじめメモしておき、設定プロファイル適用後に再設定してください。
- PowerChute Business Edition では、SMTP 認証等のユーザ認証を行う E-Mail 送信をサポートしていません。E-Mail 通知機能を利用する場合はユーザ認証を必要としない SMTP サーバを使用してください。
- PowerChute Business Edition v.6.1 の PowerChute Business Edition エージェントを PowerChute Business Edition v.7.0 のサーバおよびコンソールにて管理することはできません。同様に、PowerChute Business Edition v.7.0 の PowerChute Business Edition エージェントを PowerChute Business Edition v.6.1 のサーバおよびコンソールにて管理することもできません。

また、PowerChute Business Edition v.6.1 コンソールから PowerChute Business Edition v.7.0 サーバへの接続、および PowerChute Business Edition

v.7.0 コンソールから PowerChute Business Edition v.6.1 サーバへの接続についても同様に未サポートです。

- WebUI 機能を使用するには、Web ブラウザは以下をご使用ください。
 - Windows マシンからエージェントにアクセスする場合、Internet Explorer 6 以降をご使用ください。
 - Linux マシンからエージェントにアクセスする場合、Netscape 7.0 をご使用ください。
- Windows マシンから Internet Explorer Version 6、または Linux マシンから Netscape 7.0 を使用して WebUI 機能を利用する場合、Sun の Java Runtime Environment (JRE) が必要となります。
 - Windows マシンから Internet Explorer を使用する場合は JRE v1.4.1 または v1.4.2 をご使用ください。
 - Linux マシンから Netscape を使用する場合は JRE v1.4.1 をご使用ください。
- Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 マシンに Netscape をインストールする際、OS のインストール CD-ROM 媒体に含まれている「compat-libstdc++-7.3-2.96.122.i386.rpm」を先にインストールして下さい。

Memo

Memo

Express5800 シリーズ

PowerChute[®] Business Edition v.7.0

インストールガイド

2004 年 7 月 初版

日 本 電 気 株 式 会 社

東京都港区芝五丁目 7 番 1 号

TEL (03) 3454-1111 (大代表)

©NEC Corporation 2004

日本電気株式会社の許可なく複製・改変などを行うことはできません。
本書の内容に関しては将来予告なしに変更することがあります。